

モノと情報A

竹の焼畑と稲作儀礼と神話～竹林文化論への試み～

川野和昭（鹿児島県歴史資料センター黎明館）

キーワード：森の再生，竹の種類，水，竹細工，禁忌，播種儀礼，収穫儀礼

調査期間・場所：2004年12月10日（金）～2005年1月12日（水），ラオス人民共和国ルアンパバーン県，
ポンサリー県，ウドムサイ県，ルアンナムター県，ボケオ県

Bamboo and Rice

Interactive Dimension of Swidden' s Myth and Ritual

KAWANO, Kazuaki(Kagoshima Prefectural Museum of Culture Reimeikan)

Key word : Regeneration of the forest, Classification of bamboo, water, Bamboo ware, taboo, Various rituals and ceremonies,

1 はじめに～現地調査のねらい～

今回の調査は、ラオス北部ルアンパバーン及びウドムサイ、ルアンナムター、ポンサリー地域を対象にして、そこに生きる人々と竹と関わり合いを探ることにあった。具体的には、竹を重要視する焼畑に焦点を当て、対象とする森と竹、その竹の利用と竹細工の関係、竹の子と食、森の伐採、焼き、種蒔き、雑草、収穫、焼米、森の再生過程等に関する伝統的技術を聞き書きの手法で記述することであった。

それは、これまで筆者がトカラ列島、大隅半島、九州山地で進めてきた「竹の焼畑」と比較するという意図が含まれているものであり、平成15年度の本研究プロジェクトの調査の延長として実施したものである。特に、竹の再生力を生かした持続可能な焼畑ということを明らかにしようとするところにねらいがあった。そして、それを支えている各民族、さらには集落単位が持つアイデンティティーを探るために、神話と糯米の品種及び竹、さらに稲作儀礼との相互の関係についても聞き取りを深めてみた。また、筆者が従来試みてきた「焼畑その後」と呼ぶ、再生過程にある森の認識とその利用についても、前回の調査を深めることに努めた。それは、これらの問題がこれまでの焼畑の研究で見落とされてきた重要な問題であるという認識に基づいたものである。さらに、日本列島のなかで南九州や南西諸島という地域のローカルな問題だと思われがちな竹の焼畑が、アジアというグローバルな文化として浮かび上がってくることが期待されるからである。また、それはこれからの緑の地球の再生を考える上で、人と森との関わり方のアジア熱帯モンスーン地域からそのモデルを示すことにつながっていくという見通しも予感されるからである。

2 竹の焼畑と儀礼

(1) 焼畑の対象とする森

- ①竹と木の混合林
- ②木だけの森は、水分がない。平坦な場所がなく、岩場で高い森なので焼畑に向かない。
- ③木だけの森を焼き、竹の森を保護するモン族の焼畑の棲み分け

(2) 焼畑に適する竹の順位

(ポンサリー県・パクバーン村・ラオ族)

①マイコン

焼畑を行う森の高いところに生える竹で、水分があるところに生えている竹で、枯れている土地に植えると死んでしまう。この竹とマイコーデン（椎の木）、マイトー、マイパー、マイサーイなどの木と混じると、土地に

水分が多く、竹を下に置くと木も良く燃える。ただ、マイムアという木は、土地に水分がないので、竹が混じっても稲が枯れてしまうので焼畑には適さない。

②マイヒヤ

焼畑を行う森の高いところに生える竹で、マイコンとは異なり水分がない場所でも成長できる竹であるので、焼畑に適する。混じる木はマイコンと同じである。

③マイホック

川の近くに生えており、焼畑をするような高いところには生えていない。

※この辺りでは、森の竹と木との混ざり具合の比率は、マイヒヤが1/3、木とその他の竹が2/3程度が好まれる。竹だけの森では、鼠が多くて稲に良くない。

(ポンサリー県・カナ村・ラオ族)

①マイホック・マイコン

焼いても水を溜めているから焼いても死ななく、雨が無くても稲は育つ。稲を育てている間は竹の子は伐るが、根は生きている。この2種類の竹は、木と混じらなくても竹だけでも水分があるので稲の収穫がよい。

②マイヒヤ

マイヒヤだけの所は、パケー（年取った森）になったら根株も大きくなり、茎も大きくなり、マイホックと同じように焼畑に適するが、茎が小さいと日光が当たりすぎて稲には良くない。

※木だけの森は雨が多いと良いが、雨が少ないと土が乾くので良くない。

(ポンサリー県・ハッコ村・プノイ族)

※ヒヤチー（焼畑）には、木と竹が混じったら稲が良くできる。木だけの所は燃えないので良くない。

①ハー（マイホック）

この竹がヒヤチー（焼畑）には一番適している。伐って1ヶ月ぐらい乾燥させて燃やすと、ちゃんと燃えて水分が多く、よい土になり、稲が良く実る。

②ハーパンカー（マイコン）、マイラン

ハーと同じくちゃんと燃えて水分が多く、よい土になり、稲が良く実る。

③マイラン

①、②と同じくちゃんと燃えて水分が多く、よい土になり、稲が良く実る。

(ポンサリー県・ワンサイ村・プノイ族)

※竹と木が混じった森をヒヤ・チェー（焼畑・行う）にすると、稲がよく育つ。良く燃えて、肥料が多く出る。土に水分を多く含み、雨が降ったらちゃんと水分が残る。木だけの森でも良いが、全部が燃えない。

①ハーパン（マイホック）

②カイヒヤ（マイサン）

③ハーキャ（マイヒヤ）

④アカーチン（マイコン）

⑤アブンチン（マイラン）

(ポンサリー県・ステン村・ランテンヤオ族)

※古い村には竹があったが伐ってブラオ・ヤン（稲・畑）にすることはなかった。ブラオ・ヤンは川の近くでは行わず、森の上でするので竹がない。

(ポンサリー県・マイソンファン村・ラオク族)

①ワーサツ（マイホック）、

この竹と木とが混じっている森が、ヤコーケー・ン・エー（畑・行く・行う）に焼くのに適する森である。この竹は斜面の低いところに生えていて、水分が十分にあるからである。根株の間隔が詰まっているほどよい。稲に南瓜やトウモロコシなどを混ぜて植えると収穫がよい。

②ワーコー（マイヒヤ）

この竹と木とが混じっている森が、ヤコーケー・ン・エー（畑・行く・行う）に焼くのに適する森である。この竹は斜面の低いところに生えていて、水分が十分にあるからである。根株の間隔が詰まっているほどよい。稲

に南瓜やトウモロコシなどを混ぜて植えると収穫がよい。

③ワーミョー（マイサン）

標高の高いところに生えていて、それほど水分がない。

④パイコー（マイコン）

標高の高いところ低いところのどちらにも生えている。根株が大きいので間隔が詰まっていたらヤコークーンエーは適さないが、あちこちに散らばって生えていたら良い。

⑤チェーモン（マイラン）

標高の高いところ低いところのどちらにも生えている。根株が大きいので間隔が詰まっていたらヤコークーンエーは適さないが、あちこちに散らばって生えていたら良い。

※木だけの森は、平らな土地なら良いが斜面になるとヤコークーン・ン・エーは適さない
(ポンサリー県・ピエンサイ村・プノイ族)

※稲がきれいに良く稔る畑は、竹と木が混じっている森の方が土に水分があるからよい。竹が出ているところは、椎の木があちこちに分かれて生えているので水分が多い。また、竹があると木が良く燃えるので良い。焼畑に良くないのは、茅やニャヒー（薄）の生えている所で、土が乾いているので根まで掘り起こさなければならないからである。

①ハーボン（マイホック）

土に水分が多いから良い。

②キヤー（マイヒヤ）

土に水分が多いから良い。

③ミーヨー（マイサン）

土に水分が多いから良い。

④ハーカーチン（マイラン）

土に水分が多いから良いが、この竹だけの所は株がかたまっていて、土が硬くなっていて焼畑には適さない。

⑤チェンカ（マイパツ）

土に水分が多いから良い。

(ポンサリー県・スノーマイ村・アカ族)

①マイホック

木だけの森は水がなくて焼畑に適さない。マイホックと木が混じり合っていると、伐り株から水が出てくるし、株の周りにも水が出て来るので、稲がきれいに実る。

(ウドムサイ県・ナムレーン村・カム族)

※木だけの森は水分がなくてハレット（焼畑）にするのに適さない。木と竹が混じっている森がハレットにはよい。竹のある場所は土地に水分があり、竹を伐ると切り株から水が出てくる。

①タネック（マイホック）

水分が多い。

②ラハーン（マイサン）

タネックと似ている。

③タラッ（マイヒヤ）

川の近くに生えており、余り森の高い所（ハレットの場所）には生えていない。水分が少し少ない。

※竹と作物の関係

ルアム・タネック・ブリア・ヤ（伐る・マイホック・美しい・煙草）

ルアム・タラッ・ブリア・プリッ（伐る・マイヒヤ・美しい・唐辛子）

(ルアンナムタ県・チャルンスツ村・カムクエン族)

①マイボン

椎の木だけの森では水分がないのでハレットには適さないが、この竹が混じると水分が多いので稲が一番良く実る。

②マイホック

この竹が混じっても良いが、マイボンが混じるのが一番良い。

③マイヒヤ

この竹が混じっても良いが、マイボンが混じるのが一番良い。

(ルアンナムタ県・ウーラマイ村・アカ族)

※木だけの森は土地が乾いていて土が良くない。木とガーポー（マイホック）、ガーカ（マイヒヤ）が混じった方がよい。それぞれの落ち葉が混じているので水分があり土が良く、焼くと肥料になるのでよい。木だけの所よりも竹ばかりの所の方がよい。

①ガーポー（マイホック）

②ガーカ（マイヒヤ）

③ガーコー（マイボン）

④マーサー（マイサン）

⑤アーハー（マイコンム）

⑥ガーサー（マイサンに似た竹）

⑦ガーショ

※ガーチャーという竹は、根が多いので土が硬くなっていて、稲を植えることができないので、ラッルーヤ（焼畑）には適さない。

(ルアンナムタ県・ホエルー村・ムシュダー族)

※ハー（焼畑）にするには、木だけの森は稲がきれいに実らない。竹と木が混じった森の方が適している。

①ワッディー（マイホック）

この竹の大きいのが生えている森は、大きな（年取った）森なので何を植えても良く稔る。

②ワッパー（マイヒヤ）

この竹の大きいのが生えている森は、大きな（年取った）森なので何を植えても良く稔る。

③メートック（マイサン）

①、②とともにハー（焼畑）に適している。

(ウドムサイ県・ケオ村・カム族)

※ハレツ（焼畑）には、マイチン（木）特にマイコー（椎の木）と竹の混じったところが適している。マイチンだけだと落ち葉は多いが良く燃えないので良くない。しかし、竹が混じると良く燃える。

①マイボン

この竹にマイチンやマイサン、マイホックという竹が混じると、良く燃え肥料も多く出て、水分も十分にあるので、稲が良く実る。

②マイサン

③マイホック

④マイソツ

この竹にマイチンやマイヒヤという竹が混じると、良く燃えるが根株まで燃えてしまって、水分が少なくなる。

⑤マイヒヤ

この竹にマイチンやマイソツという竹が混じると、良く燃えるが根株まで燃えてしまって、水分が少なくなる。

※マイライという竹だけの森になると、根が一面に生えるので土地が乾燥し、森の木が出てこないでハレツ（焼畑）には適さない。

(ウドムサイ県・ホイリアン村・カム族)

※木に竹が混じると水分が多くハレツ（焼畑）にはよい。また、良く燃えるので肥料が多く出る。ただ、竹の葉が黄金色になっているところは土地が乾いているので、緑の葉の所を選ぶ。また、パケー（年取った森）の場合は、木だけの森でもハレツに伐り開いてもよい。

①マイコンム

マイチン（木）にこの竹が混じるのが最もよい。

②マイライ

この竹はマイチンと混じると良いが、この竹だけでは根が広がっていてハレツには余り適さない。

③マイヒヤ

この竹はマイチンとマイホックが混じると良いが、この竹だけでは燃えるのが早すぎて、土地がよく燃えず、稲が良く育たない。

④マイホック

この竹だけの森だと根株が大きくて水分も多すぎるのでよく燃えないが、木と混じるとよい。また、マイヒヤが混じるとよい。

(ウドムサイ県・パクメン村・カム族)

※木に竹が混じった森の方がハレツ(焼畑)にはよい。パケー(年取った森)でも竹の根は残っていて生きてるので土に水分があり、伐採するとその竹が新しい芽を出して竹の森に再生する。

①マイホック

燃やすと土にいい肥料になる。しかし、根っ子が全部死ぬことはなく新しい芽が出てきて、再びきれいに成長する。

②マイヒヤ

燃やすと土にいい肥料になる。しかし、根っ子が全部死ぬことはなく新しい芽が出てきて、再びきれいに成長する。

③アイコンム

燃やすと土にいい肥料になる。しかし、根っ子が全部死ぬことはなく新しい芽が出てきて、再びきれいに成長する。

(ルアンパバーン県・ホイジン村・カム族)

※木ばかりの森は、標高の高い所にありモン族が焼畑に伐るが、レーン(若い森)の期間が長すぎて、ほとんど1回しか焼畑にできない。竹と木の混じっている森が、土に水分があるから稲の稔りがよく焼畑に適している。竹だけの森も、土地が枯れて土が硬くなって余り良くない。

①プライ(マイライ)

この竹は、根が広がっているので水分が多く、マイチンと混じるとよい。稲は背丈が高くならないが、穂がいっぱい付く。

②タネック(マイホック)

この竹は、株が大きく水分があって、よく燃えるので肥料が多く出る。

③タラー(マイヒヤ)

この竹が出ているところは、土地が柔らかく、稲が倒れるほどによく稔る。

④ラハーン(マイサン) この竹は、水分も少なく根が広がっていて、土が硬く稲の栽培にはそれほど適さない。

※竹と作物の関係

プリー・プライ・ブリア・ゴ(森・マイライ・よい・稲)

プリー・タネック・ブリア・プリッ(森・タネック・よい・唐辛子)

プリー・ラハーン・ブリア・ヤ(森・マイサン・よい・煙草)

(3) 竹細工に適する順位

(ポンサリー県・パクバーン村・ラオ族)

①マイホック

床板、竹紐、カブン(舂運び籠)、ウー(揺り籠)、カター(野菜籠)、コーン(魚籠)フアッ(飯蒸し籠)、筏

②マイヒヤ

家の壁板、屋根葺き材、柵

③マイコン

船の棹、家の垂木材

(ポンサリー県・カナ村・ラオ族)

①マイホック

ヘックワイ (背負い籠), ニャンカイ (鶏入れ籠), ドン (脱穀調整用円形浅底笊: 節が長いので用いる), クーン (脱穀調整用円形浅底

篩: 節が長いので用いる), ヘットウ (竹紐), サイ (筥), ファック (床板), ペー (筏)

②マイヒヤ

ファー (竹壁), ファームー (屋根葺き材), サート (床マット), ファッ (飯蒸し籠), ドン (脱穀調整用円形浅底笊: 節が長いので用いる), クーン (脱穀調整用円形浅底篩: 節が長いので用いる), サイ (筥), コーン (魚籠), クップ

③マイコン

垂木材

(ポンサリー県・ワンサイ村・プノイ族)

①ハーパン (マイホック)

家の床板, 竹紐, 柱, 垂木材

②カイヒヤー (マイサン)

畑の柵の紐, 屋根葺き茅の綴じ紐, ヤン (背負い籠), カブン (舂運び籠), ドン (脱穀調整用円形浅底笊), クーン (脱穀調整用円形浅底篩), 屋根葺き板材, 竹マット, 竹水筒

③ハーキャ (マイヒヤ)

竹壁, 屋根葺き板材

(ポンサリー県・マイソンファン村・ラオケー族)

①ワーサッ (マイホック)

カトー (背負い籠), コッオー (脱穀調整用円形浅底笊), プーチェ (脱穀調整用円形浅底篩), ヤープレ (家の壁板), ユーツー (床板), イーター (屋根葺き茅の芯竹), ヌンコー (竹紐)

②ワーコ (マイヒヤ)

ヤープレ (家の壁板), ユーツー (床板), コーチー (米倉の壁・床板), カラツー (竹マット)

③ワーミョー (マイサン)

ヌンコー (竹紐), ユーツー (床板), ワボーイクー (小屋の柱)

④バイコー (マイコン)

ヤケ (畑の柵), ウニュー (屋根の垂木)

⑤チェーモン (マイラン)

カトー (背負い籠), ヌンコー (竹紐), ブルー (魚籠)

(ウドムサイ県・ナムレーン村・ラオケー族)

①タネック (マイホック), ラハーン (マイサン)

ブリアン (脱穀調整用円形浅底笊), タラユール (脱穀調整用円形浅底篩), タンブレリャン (床板家の壁板), ラ (屋根葺き板材), ニャーン (鶏入れ籠), ヤン (畑の柵), フルノム (竹紐), 竹の下駄

②タラッ (マイヒヤ)

①の他にクルン (板壁)

(ルアンナムタ県・チャルンスツ村・カムクエン族)

①タパンチュック (マイボン: 強く丈夫で, 節も長い)



竹筏 ハッコー村



舟着き場収集された竹



コンニャク (前) と籾を干す竹マット ハッコー村

ヤン（背負い籠）、クンワー（柵）、サオンカーン（家）のメンジュン（垂木）、プラーン（小屋の垂木、根太）、ユーン（米倉の垂木、根太）、ルックラッ（屋根葺き茅の芯竹）、ラノーム（竹紐）、ファッ（飯蒸し籠）

②タパンタネック（マイホック）

タンプリエン（竹床）、トンミエン（発酵茶ミエンの竹筒）、ピアル（脱穀調整用円形浅底笊）、タラユルー（脱穀調整用円形浅底篩）、ホンクルン（壁板）、ラノーム（竹紐）



③タラー（マイヒヤ）

ホンクルン（家の壁板：肉が薄くてやりやすい）、ピアル（脱穀調整用円形浅底笊：表皮が薄くてヒゴが作りやすい）、タラユルー（脱穀調整用円形浅底篩：表皮が薄くてヒゴが作りやすい）、ヤンイヤル（鶏入れ籠）

ピアルの縁かがい チャルンスツ村

④ラハー（マイサン）、タパンチョイ（マイソツ）

サップアン（竹マット）、タンプリエン（竹床）、トンミエン（発酵茶ミエンの竹筒）、ピアル（脱穀調整用円形浅底笊）、タラユルー（脱穀調整用円形浅底篩）、ホンクルン（壁板）、ラノーム（竹紐）

⑤タパンサゲ（マイワン）

タンプリエン（竹床）、トンミエン（発酵茶ミエンの竹筒）、ホンクルン（壁板）、ラノーム（竹紐）
（ルアンナムタ県・ウーラマイ村・アカ族）

①ガポー（マイホック）

アーネカ（竹紐）、ガーチョ（床板）、カーサ（野菜入れ籠）、カーピョー（壁板）

②ガーカ（マイヒヤ）

竹細工には何にでも利用できる。特に、節間が50釐～100釐と長いから竹細工に適している。

③ガーコー（マイボン）

④マーサー（マイサン）

年を取った竹を家の柱に用いる。5～6年は長持ちする。

（ルアンナムタ県・ホエルー村・ムシュダー族）

①ワッディー（マイホック）

ウカウ（竹水筒）、プー（食台）、ハマ（脱穀調整用円形浅底笊）、ハクー（脱穀調整用円形浅底篩）、テーピ（壁板）、ウーパ（屋根葺き板）、クー（竹コップ）、クツ（御飯茶碗）、シャカ（飯蒸し器）、ヤム（杓文字）、エクー（家の柱）

②メートック（マイサン）

テーピ（壁板）、ウーパ（屋根葺き板）

③マイヒヤ

コジィ（竹マット）、テーピ（壁板）、ウーパ（屋根葺き板）

（ルアンナムタ県・ホエルー村・ムシュダー族）

（4）竹の子の美味しさと旬

（ボンサリー県・パクバーン村・ラオ族）

①ノーコン……12月～6月

※この竹に煮た竹の子にノークーツ（苦いが丁度良い苦さの竹の子）、ノーサウイ（ノコンと同じ）、ノーラン（苦い）などがある。

②ノーホック……6月～9月

③ノーヒヤ…6月

（ボンサリー県・カナ村・ラオ族）

①ノーホック…5月～11月

- ②ノーヒヤ……5月～8月
- ③ノーコン……12月～4月
- ④ノーパイ……5月～11月
- ⑤ノーボン……7月～9月
- ⑥ノーサン……5月～8月
- ⑦ノープアッ……5月～8月
- ⑧ノーワン……6月～8月
- ⑨ノーボー……2月～9月
- ⑩ノークッド……6月～8月
- ⑪ノーサウィ……6月～8月

(ポンサリー県・ワンサイ村・プノイ族)

- ①ハーパン (マイホック) ……6月～8月
- ②カイヒヤー (マイサン) ……6月～8月
- ③ハーキャ (マイヒヤ) ……6月～8月
- ④アカーチン (マイコン) ……12月～3月
- ⑤アプンチン (マイラン) ……12月～3月
- ⑥ハプンカ (マイワン) ……12月～3月

(ルアンナムター県・チャルンスッ村・カムクエン族)

- ①タパンサゲ (ノーワン)
- ②タパンプアット (ノーラン), タパンタネック (ノーホック)
- ③タパンチャック (ノーコム)
- ④タパンチュック (ノーボン)
- ⑤タパンサポーツ (ノーボツ)
- ⑥タパンクロンレック (ノーブン)
- ⑦タパンチョイ (ノーソット)
- ⑧ラハー (ノーサーン)

※⑦, ⑧は順番は付けにくいぐらいで同等である。

(ルアンナムター県・ホエルー村・ムシュダー族)

- ②プトー (ノーコム)
- ③ワチートー (ノーワン)
- ④ワッパー (ノーヒヤ)

(ウドムサイ県・ケオ村・カム族)

- ①パンチャッ (ノーコム) ……12月～5月
- ②パンプライ (ノーライ) ……8月～9月
- ③パンタネック (ノーホック) ……8月～9月
- ④パンチュック (ノーボン) ……8月～9月
- ⑤パンラハー (ノーサン) ……8月～9月
- ⑥パンタラー (ノーヒヤ) ……8月～9月
- ⑦パンチョイ (ノーソツ) ……8月～9月

※⑦は苦いのであまり食べない。

(5) 竹の子と調理法

(ポンサリー県・パクバーン村・ラオ族)

- ①ノーコン

せたけが20分ぐらいまでは甘い。それ以上になると少し苦くなるが、好きな人は焼いて食べる。

- ①ワッディー (ノーホック)

ノーパオ……皮のまま直火で焼いた焼き竹の子。

ノーモック……皮のまま、あるいはバナナの葉に包んで、火を焚いている囲炉裏の灰の中に入れて蒸し焼きにした蒸し焼き竹の子。ノーパオに比べて香りがなくて美味しくない。

ノーケーン…生のままスライスして煮たスープ。

②ノーホック

ノーヘン……乾燥竹の子。皮をむいて湯がいて、縦に割いて天日に干して乾燥させて保存する。薫製は良くない。

ノーソン……発酵竹の子。皮をむいて湯がいて、縦に割いて水洗いして、水切りして壺に入れる。その中に、塩を水で炊いて冷ましてから、竹の子が被るぐらい入れる。竹の子は発酵して2～3年保存できる。野菜などと炒めて食べる。

③ノーヒヤ

ノーソン……発酵竹の子。皮をむいて湯がいて、縦に割いて水洗いして、水切りして壺に入れる。その中に、塩を水で炊いて冷ましてから、竹の子が被るぐらい入れる。竹の子は発酵して2～3年保存できる。野菜などと炒めて食べる。

(ポンサリー県・カナ村・ラオ族)

①ノーホック

ノーケーン……スープ

ノーモック……蒸し焼き竹の子。皮をむいて味付けして、バナナの葉に包んで、火を焚いている囲炉裏の灰の中に入れて蒸し焼きにした蒸し焼き竹の子。

ノースップ……竹の子サラダ。

ノーヘン……乾燥竹の子。皮をむいて湯がいて、縦に割いて天日に干して乾燥させて保存する。

ノーソン……発酵竹の子。

ノーソンクァー……皮をむいて塩漬けして発酵させて保存する。

ノーソンコーン……皮をむいて割いて臼と杵で搗いて、マイヒヤの竹筒に入れて、囲炉裏の上の棚に置いて発酵させて、保存する。

ノーソンニープ……皮をむいて割いて一晩水に浸けておいた竹の子を竹筒の中に入れて、それを地面に突きたてた木の杭に逆さに被せて、竹筒の上に重しの石を乗せて発酵させる。

②ノーヒヤ

トムキン……湯がき竹の子。湯がいて野菜として料理する。

ノーケーン…スープ

ノーソン……発酵竹の子

③ノーコン

ノーチー…皮のまま直火で焼いた焼き竹の子。

ノーケーン…スープ

※苦いからノーソンにはしない。

④ノーパイ

ノーチー…皮のまま直火で焼いた焼き竹の子。

ノーケーン…スープ

ノーソン……発酵竹の子

(ポンサリー県・ワンサイ村・プノイ族)

①ハーパン (マイホック)

ノートン…スープ

ノーケン…スープ

ノーネッ……皮をむいて割いて一週間竹筒の中に入れて水に浸けて発酵させ、それを地面に突きたてた木の杭に逆さに被せて、竹筒の上に重しの石を乗せて水を切り、乾燥させる。スープや炒め物に利用する。

②カイヒヤー (マイサン)

ノーネツに同じ。

③ハーキャ (マイヒヤ)

ノーネツに同じ。

(ボンサリー県・マイソンファン村・ラオクー族)

①ワッディー (ノーホック)

ミープー……湯がいて辛子味噌を付けて食べる。

アザア……スープ

ミチュー……ノーソン

ミークー……ノーソンを天日に干したものを、畑に持っていくときに持ちやすい。魚や鳥のスープに入れて調理して食べる。ノーソンそのものよりも美味しい。

ミーズ……皮をむいて湯がいて水で洗って、割いて竹筒の中に入れて、それを地面に突きたてた木の杭に逆さに被せて、竹筒の上に重しの石を乗せて水を切り、乾燥させる。スープや炒め物に利用する。

※焼き竹の子には苦いので不向きである。

②ワッパー (ノーヒヤ)

ミープー……湯がいて辛子味噌を付けて食べる。

アザア……スープ。皮をむいて割いて、3日間ぐらい木灰汁に漬けて、アクを抜いて洗ってスープにして食べる。

※焼き竹の子には肉が薄いので不向きである。

③ワーミョー (マイサン)

ミープー……湯がいて辛子味噌を付けて食べる。

ミチュー……ノーソン

ミークー……ノーソンを天日に干したものを、畑に持っていくときに持ちやすい。魚や鳥のスープに入れて調理して食べる。ノーソンそのものよりも美味しい。

ミーズ……皮をむいて湯がいて水で洗って、割いて竹筒の中に入れて、それを地面に突きたてた木の杭に逆さに被せて、竹筒の上に重しの石を乗せて水を切り、乾燥させる。

※焼き竹の子には美味しくなくて不向きである。

※スープには美味しくないのでしない。

プトー (ノーコム)

ミープー……湯がいて辛子味噌を付けて食べる。

ミチュー……ノーソン

ミークー……ノーソンを天日に干したものを、畑に持っていくときに持ちやすい。魚や鳥のスープに入れて調理して食べる。ノーソンそのものよりも美味しい。

ミーズ……皮をむいて湯がいて水で洗って、割いて竹筒の中に入れて、それを地面に突きたてた木の杭に逆さに被せて、竹筒の上に重しの石を乗せて水を切り、乾燥させる。

※ノーソンにはしない。

③チャーモン (ノーラン)

ミープー……湯がいて辛子味噌を付けて食べる。

ミーピィ……皮のまま直火で焼いた焼き竹の子。

ローソーユー……蒸し焼き竹の子。皮の付いたまま火を焚いている囲炉裏の灰の中に入れて蒸し焼きにして辛子味噌を付けて食べる。

(ウドムサイ県・アムレーン村・カム族)

①タネック (ノーホック)

コンブ……湯がき竹の子。湯がいて辛子味噌を付けて食べる。

タバンチャップ……発酵竹の子。皮をむいて割いて塩を付けて、壺に漬け込んで発酵させる。直ぐに食べるときは、皮をむいて割いて水に入れておいて、3日ぐらいして食べる。

タバンプヌイ……皮をむいて割いて水で洗って天日で乾燥させる。



ノーネツ ワンサイ村

(ウドムサイ県・ケオ村・カム族)

①パンチャツ (ノーコム)

焼き竹の子……皮のまま直火で焼いた焼き竹の子。

※他の竹の子はだいたいノーソンにするが、この竹の子はノーソン(発酵竹の子)にはしない。
ノーソン……発酵竹の子。皮をむいて割いて水洗いして、水切りして塩を付けて、壺の中に漬け込んで発酵させる。3日間で食べられるようになる。

パンチャップライ……発酵・乾燥竹の子。皮をむいて割いて水に3日間浸けてから天日で乾燥させる。

パンエップ……皮をむいて割いて竹筒に入れて、重しをしておく。3日間で食べられるようになる。

(5) 伐採に関わる儀礼(畑地の選び方)と信仰

(ポンサリー県・パクバーン村・ラオ族)

儀式名 リヤン・ピー・パーサ(食べさせる・霊・墓)

3月初めに森を切り始める。畑に切り開こうとする場所が死者を土葬したお墓の後の森の場合は、「あなた方の家はめっちゃくちゃになっていますので片づけますよ。その代わりに豚を食べさせますよ」といって、豚を殺して霊たちに供えて食べさせる。

①伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

リヤン・ピー・パーサを終わった夜、犬、猫、森火事などの夢を見たら、霊は許してくれていない。それを無視して森を伐ったらその人は病気になる。

イ 野生動物によるお告げ

お墓の跡地の森でなくとも、伐り始めて木の上に蜂の巣がかかっていたらそこは伐ってはならない。それは、病気を治す儀礼に用いる蠟燭は蜂の巣で作るからで、そのような蠟燭を作るようなことをすると、お前たちは病気になるよという霊の知らせだからである。

森を伐っているときに、鹿、豚、鳥の死骸を見つけたら伐ってはならない。これは、霊がその森を使わせたくないというお告げで、それを無視して森を伐ったらその人は死ぬ。お米は食べたいが、死にたくないので現在も守っている。

②伐採許可のお告げ

ア 夢によるお告げ

洪水や川の夢を見たら、稲がたくさん穫れる徴なので畑に伐ってよい。

(ポンサリー県・カナ村・ラオ族)

儀式名 シアン・ラン・ファン(占い・知らせ・夢)

2月～3月にかけて森を伐り開く。パーラオ(若い森)の時は何もしないが、パーケー(年取った森)の場合はこの儀礼を行う。この儀礼は、1979年から以降やっていない。特に最近、パーオン(パーラオとパーケーの間の森)をハイ(畑)にすることが多くなり、パーケーをハイにすることが多くなってきたからである。

① 伐採禁止のお告げ

ア 野生動物によるお告げ

伐ろうとする範囲を決めて、その中央で竹でも木でも一尋の長さ伐って、地面の土を少し掘って「これからここを畑にしたい。もし伐ってはならないなら、動物の鳴き声を出させてください。」と言って、突き刺す。鳴き声が聞こえたら伐ることはできない。

イ 夢によるお告げ

①で突きたてた棒を抜いて、親指ぐらいの土を取って家に持ち帰り、枕の下に入れて夢を見る。もし、猿、犬の夢を見たら伐ってはならないという霊のお告げである。猿と犬は霊の代表で、その土地は所有者(霊)がいるという知らせである。それでも無視して森を伐ったら家族の人間が病気にかかる。

② 伐採許可のお告げ

ア 野生動物によるお告げ

①のアの占いで動物の鳴き声が何も聞こえなかったら伐採してよい。

イ 夢によるお告げ

洪水や川舟の夢を見たら伐って良いという。それは、稲の魂が来るという知らせである。特に、川を流れ下ってくる川舟は、粉を袋に入れた姿を現しているからであるという。

(ポンサリー県・ワンサイ村・プノイ族)

そろそろ焼畑に森を伐ろうというところに、皆でいい日を選んで確認に行く。その帰りにその土地から土と石とを持ち帰り、枕の下に入れておいて夢を見る。1週間から2週間経った3月に伐り始める。

① 伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

人を殺したり、喧嘩をしたり、動物を殺して食べたりする夢を見たら伐ってはならない。

イ 野生動物によるお告げ

伐っている最中に野生動物の死骸を見たら、家族の誰かが病気になったり死んだりするので伐採を止める。たとえそこを焼畑にしても収穫した米は食べられない。蜂の巣があっても人が死ぬ徴なので伐るのを止める。

② 伐採許可のお告げ

ア 夢によるお告げ

洪水、川、水の夢を見たら伐採してよい。これらは水即ち雨を意味するので、稲の実りの知らせである。

水牛、森羊の夢を見たら伐採してよい。これらの動物は、稲を刈り取るときに畑に集まってくるので、稲の実りの知らせである。

(ポンサリー県・マイソンファン村・ラオクー族)

儀礼名 ヤコー・チー・リコー (畑・伐る・儀礼)

儀礼の前に、横に川があるような場所を適当に探す。畑にする範囲を示すためにヤコー・マアック (畑・標) と言って、所々の立木に山刀で切り込みを入れておく。

① 伐採禁止のお告げ

ア 卵によるお告げ

伐る日には、畑に伐る森の中央部分を切り開いて広場にする。家から持参した刀で深さ20センチぐらいの穴を掘り、持参した生卵を左手で胸の高さから投げ落とす。卵を落とす前に、そこにいる霊に対して畑にすることを許して、稲も多く取れ、家族が病気にならないようにしてくださいとお願いをする。落とした卵が割れなかったら、霊がお前たちは邪魔をしないでくれと知らせているので、畑に伐ることはできない。

イ 野生動物によるお告げ

また、卵が割れても、その時鹿が鳴いたら同じく畑に伐ることはできない。さらに、ノグー (野生の鳥: 鶉に似た鳥) が飛んで通ったら同じく畑に伐ることはできない。霊の許可が出たら伐り始める。

しかし、森を伐っている最中に鹿が鳴いたり、ノグーが飛んだり、パーエー (穴熊) の死骸を見たり、誰かがパーエーを食べた跡があったら、霊がお前たちは邪魔をしないでくれと知らせているので、畑に伐ることはできない。夢による知らせはない。

(ポンサリー県・ピエンサイ村・プノイ族)

これまで畑にしたことのない場所であったら、畑に伐り開く範囲を決めて、木の枝などを削って標をする。その夜夢を見る。

① 伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

馬、豚、家鴨の夢を見たら伐ってはならない。馬や豚は、その森に強い霊が存在するということが分かる動物だからである。家鴨は、川の源流に霊がいるという知らせだからある。

② 伐採許可のお告げ

ア 夢によるお告げ

お坊さんの夢、よその人が贈り物を持って来る夢、川の水、支流の夢を見たら伐採してよい。お坊さんは、稲を収穫したら先ずお坊さんに食べさせるので、お坊さんが恩返しに増収をもたらしてくれると考えられているか

らである。また、贈り物の夢は、稲が贈り物としてやってくることの知らせだからである。川の水、支流の夢は、水即ち雨の豊かさを現し、稲がきれいに実するという知らせである。

(ルアンナムター県・ウーラマイ村・アカ族)

ラドウヤ（焼畑）を伐る前に一日かけて場所を選びに行く。伐る範囲を決めて、それを表示するために木を伐って標を付けておく。場所を選定するときは、川の源流（湧水源）の辺りでは特に注意しなければならない。そこには霊がいるから、勝手に伐ると霊にやられる。「ここでラドウヤを開きたい、もし宜しくなければ夢で知らせてください」とお願いする。

① 伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

犬、牛、水牛の夢を見たらラドウヤに伐ってはならない。この夢を見たらその霊が許可しないと言うことを知らせてきたのだから、伐ると病気にされるので恐いから伐らない。

② 伐採許可のお告げは特にない。

(ルアンナムター県・ホエルー村・ムシュダー族)

儀礼名 ネテー

村の長老2～3人が代表になって、蜂の巣、生きている雌雄二羽の鶏（色は何色でもよい）を持って森に行き、ネテーという儀礼を行う。伐ろうとする森で、クー・テー（台・竹）という高さ60cmの4本足に、40cm四方の竹編みのマットを乗せた台を作る。殺して調理した鶏、水を入れたカップ4個、ローソク2本、20本に刻んだローソクをクーテーに供え、2本のローソクに火を着け、「ここで焼畑を1年間行います。ここにいる霊は違うところ行ってください。我々が病気になるようにしてください」とお願いをする。その後2月の初めによい日を選んで森を伐る。

① 伐採禁止のお告げ

ア 野生動物の出現による禁止

森をある程度の広さ伐って、10～30分待っていてその間鹿などの野生動物が出てきたら伐るのを止める。何も出てこなかったら伐り進めるが、途中で野生動物が出てきても伐るのを止めなければならない。

(ルアンナムター県・チャルンスツ村・カムクエン族)

ハレッ（焼畑）に伐ろうとする範囲を決めたら、その中で少し伐り開いて火を焚き、家から持ってきた貝殻虫の巣を燃やす。これは、貝殻虫の巣が山刀と柄の強力な接着剤であるので、ハレッを行うことを強くするための呪いである。また、自分が着古した着物の端切れを燃やす。これは、端切れ燃える臭いで、この範囲は私たちのものだとして霊に告げて、別の場所に移ってもらうために行うものである。さらに、火の周りにラヴェツ（生姜）を植える。これは、自分たちの畑として作物を植えたということを霊に告げるためである。家に戻ってその夜夢を確認する。

① 伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

自分がきれいな着物を着ている夢、楽しく歌ったり踊ったりする夢を見たら伐ってはならない。歌や踊りの夢は人が死んだときに泣いていることを知らせる夢である。これらの夢をみても森を伐ったら病気になるので、伐るのをあきらめる。しかし、他の人には霊が許してくれる場合もあり、誰もが伐れないということではない。

② 伐採許可のお告げ

ア 夢によるお告げ

水、川、象の夢を見たら伐ってよい。この夢は、畑に植えた作物がきれいに育ち、実りも良くなるという知らせである。

※木は、腰の高さぐらい（50センチ～110センチ）の高さの所から伐る。これは、伐りやすいことと、その木が再生するように残すための伐り方である。

(ウドムサイ県・ケオ村・カム族)

1月の初めからよい日を選んでハレッ（焼畑）にする土地を選びに行く。土地が決まったらよい日を選んで、砥石、貝殻虫の巣を持って森に行き、火を焚いて砥石で山刀を研いで、周りを何本か伐り、「これからここで焼

畑をやります。いい夢を見るように、稲の収穫がたくさんありますように」と唱える。

① 伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

太陽や星の夢を見たら、それはタレオの標であるので焼畑に伐ってはならない。また、倒れた木の上に乗っている夢を見たら、それは死んだ人を運ぶ姿を表しており、自分が死ぬという徴だから焼畑に伐ってはならない。さらに、車や飛行機に乗っている夢も同様の意味で焼畑に伐ってはならない。

小さな川の夢は、畑が木株だけになるという徴なので、焼畑に伐ってはならない。また、透明な水や川に倒木がある夢も焼畑に伐ってはならない。

イ 野生動物によるお告げ

伐っているとき鹿やその他の野生動物、野生の鳥などの鳴き声が聞こえたら伐るのを止める。これは、そこにいる霊がここを焼畑に伐ってはいけないと知っている知らせだからある。

② 伐採許可のお告げ

ア 夢によるお告げ

濁った水、洪水の夢を見たら、それは稲がきれい（黄金色）に実ると言う標であるので、焼畑に伐ってよい。唐辛子や茄子を採っている夢をみたら、それは稲の魂が収穫を知らせている徴だから、焼畑に伐ってよい。また、何も夢を見なくても、それは草取りの時に頭の上は稲だけ実って何も見えない状態であることの徴だから、焼畑に伐ってよい。

(ウドムサイ県・パクメン村・カム族)

儀礼名 リーチャ・ルアン・ハレット (儀礼・伐る・畑)

ハレットにする場所を選んで、その範囲を示すため木に3回切り込みを入れ、そこに土を入れる。次に、火を焚いて持参した唐辛子、貝殻虫の巣を燃やし、その場所にいる霊に「ここは私が畑にしますので、他の人がこの場所を取らないようにしてください」とお願いをする。その後家に帰ってきて夢を見る。

① 伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

誰かが鍛冶屋をやっている夢と大きな木を伐採する夢を見たら、人が死ぬという徴なので焼畑に伐ってはならない。

イ 野生動物によるお告げ

ハレットの範囲を示すため木に3回切り込みを入れたあと、休憩して野生動物の鳴き声を聞く。もし、その時鹿の鳴き声が聞こえたら伐るのを止める。鳥の鳴き声は支障はない。

② 伐採許可のお告げ

ア 夢によるお告げ

畑で大蒜とかを植えている夢、満水状態で流れている川の夢を見たら、焼畑に伐ってよい。

(ルアンパバーン県ホイジン村・カム族)

儀礼名 クロン・ハレット (始める・畑)

いい日を選んで畑に伐ろうと思うところに行く。持参した砥石を横に置き、片腕ぐらいの枯れ竹の先を割って、家から持ってきたハーロウェツ (生姜)、ラレーンという木葉を中に入れて左手に持ち火を着けて、片手で山刀を持ちその周りの木伐りを2, 3本伐る。その時、「これからここを畑に伐ります。悪い霊などは逃げてください」と唱え、悪い霊を追い払う。その後家に帰ってきて夢を見る。

① 伐採禁止のお告げ

ア 夢によるお告げ

稲の夢と高倉の夢を見たら、その森は死人を埋葬した場所でその霊がいて、稲と高倉はその霊のものであるという徴なので焼畑に伐ってはならない。

イ 野生動物によるお告げ

木を伐っている最中に蜂の巣を見つけたら、それは死人を運んでいる形で死人が出る徴なので伐採を止める。

② 伐採許可のお告げ

ア 夢によるお告げ

水や満水状態で流れている川、洪水の夢を見たら、焼畑に伐ってよい。

(6) 焼き始めの儀式・焼き方

(ポンサリー県パクバーン村・ラオ族)

①焼き始めの儀式

いい日を選んで、家で使っている箒の先端や貝殻虫の巣、唐辛子を持って畑に行く。枯れ竹の先を割って、そこに持参した箒の先端や貝殻虫の巣、唐辛子を挟んで、火を着けて振り回しながら、伐った畑の中にある霊に「ここにいる霊たちは、これから焼きますのでどこかに逃げて下さい」と唱える。箒は霊が恐がるものであり、貝殻虫の巣、唐辛子の焼ける臭いも霊が恐がるものである。

②焼き方

ティンハイ（畑の足：下側の縁）に1畝から2畝の間隔で火を着ける。カンクワア（右脇の縁）とカンサイ（左脇の縁）を上に移しながら火をつけていく。

このごろは保護林が設定されて、政府からの指導によって保護林とファハイ（畑の頭：上側の縁）の間に、1.5畝ぐらいの防火帯を伐り、上側から下側に焼く方法になってきた。

(ポンサリー県カナ村・ラオ族)

①焼き始めの儀式はない。

②焼き方

ティンハイ（畑の足：下側の縁）、風上から火を着けて焼く。切り倒した竹や木の枝が斜面の下側に倒れているからよく燃えるからで、ファハイ（畑の頭：上側の縁）から焼くとよく燃えない。

家の主人は、霊に通じるカター（呪術）を持っているので、そこに霊がいるかいないかが分かるので、霊がいたら森から霊を追い出すために呪詞を唱えてから火を着ける。

(ポンサリー県スンテン村・ランテンヤオ族)

①焼き始めの儀式はない。

②焼き方

伐って1ヶ月枯らしてから焼く。ヤンシャ（畑の尻尾：下側の縁）、風上から火を着けて焼く。切り倒した竹や木の枝が斜面の下側に倒れているからよく燃えるからで、ファハイ（畑の頭：上側の縁）から焼くとよく燃えない。

(ポンサリー県マイソンファン村・ラオクー族)

儀式名 ヤコー・ピ（畑・焼く）

①焼き始めの儀式

焼く前に「これから燃やしますので、ここに霊がいたら逃げてください。ちゃんと燃えるようにしてください」と、1回だけ唱える。

②焼き方

ヤコー・ヤートー（畑の足：下側の縁）に火を着け、ヤコー・ウントー（畑の頭：上側の縁）に向けて焼く。ただ、ヤコー・ウントーの所に燃やしてはいけない霊のいる場所や人の住む村があったら、ヤコー・ウントーの上側を1.5畝ぐらいの幅をきれいに掃除をし、上半分を焼いてその後でヤコー・ヤートー（畑の足：下側の縁）に火を着けて下側半分を焼く。ヤコーヤチェ（右脇の縁）やヤコーチャー（左脇の縁）に同じような場所があったら、その脇を同じように掃除して焼く。これは昔からやっている方法である。

(ポンサリー県ピエンサイ村・プノイ族)

ヒヤー・マー（畑・新しい）は、9月と1月の2回に分けて伐る。

①焼き方

ア 9月

9月に畑にする範囲の上側半分を伐り、根を掘ったりして、12月に焼く。中央の線から火を着けヒヤーユクン（上側の縁）に向けて焼いて上がる。12月だと周囲の森がまだ枯れていない（湿っている）ので周囲に飛び

火しない。焼いた後ヒヤチェチェと称して燃えていないものを集めて焼く。さらに根を掘ったり草取りしたりして、1月に土を耕す。

イ 1月

9月に焼いた上側を耕しながら、並行して下側の半分を伐って3月に焼く。3月に焼くとそのまま土が乾燥しているので、耕さなくてもよい。しかも、上側半分が既に焼いてあるので火が上に飛ぶ危険がない。

(ルアンナムター県ウーラマイ村・アカ族)

①焼き方

ラッルー・ヤ（焼く・畑）は、ヤ・トン（畑・尻：下側の縁）からヤ・グン（畑・頭：上側の縁）に向けて焼いて上がる。今年焼いた畑のとなりに隣接して次の年畑を開く場合は、畑の四辺のうち一辺の側だけ伐り開いて、後の三辺に隣接する土地は伐り開いてはならない。2辺以上に隣接する土地を伐り開くと、霊に対してよくないからである。

(ルアンナムター県ホエルー村・ムシュダー族)

①焼き始めの儀式

焼く前に「これから火を着けます。虫や動物、霊がここにいたら逃げてください」と言って火を着ける。

②焼き方

伐って20～25日乾燥させてから3月に焼く。ハー（畑）は、ハー・マミー（畑・下：下側の縁）に火を着け、ハー・クー（畑・上：上側の縁）に向けて焼いて上がる。ハー・クーから火を着けて焼いても燃えない。防火帯を作ることはない。

(ルアンナムター県チャルスツ村・カムクエン族)

①焼き方

まず、モッカ・レッ（頭・畑：上側の縁）の中央から右側半分を数センチ幅下側から焼き、次に同じように左側半分を焼く。これは、火が上側の森に飛ばないように防火帯を設けるための作業で、この方法だと火が強くなくゆっくり燃えるので、火が飛ぶことはない。

その後、ユアン・レッ（尻・畑：下側の縁）からモッカ・レッに向けて焼き上げていく。

この焼き方は、先祖の時代からそのまま行ってきたクエン族の伝統的な方法である。モン族やアカ族は、クエン族と違って防火帯を設けるようなことをせず、そのまま燃やしてしまって飛び火したりさせて、森を燃やしてしまっている。しかし、クエン族はそんなことはしない。

(ウドムサイ県パクメン村・カム族)

①焼き始めの儀式

焼く前にマイホックの竹筒に水を入れて、森の霊を呼んで「これから燃やします。水も準備しました。火が飛んだら一緒に消してください」と言って火を着ける。

②焼き方

畑の周りに10センチ幅のトゥロンプルナツ（防火帯）を作り、最初にカッポン・ハレッ（頭・畑：上側の縁）の上側のトゥロンプルナツを焼く。これは、火が上側に飛ばないようにするための作業である。そのためにトゥロンプルナツの場所には竹や木を余り多く置かないようにする。次に、カッポン・ハレッの下側数センチ幅を焼く。最後にド・ハレッ（尻・畑：下側の縁）からカッポン・ハレッに向けて焼き上げていく。

(ルアンパバーン県ホイジン村・カム族)

①焼き方

畑の周りに2センチ幅のパイプロナイ（防火帯）を作り、ド・ハレッ（尻・畑：下側の縁）からカッポン・ハレッ（頭・畑：上側の縁）に向けて焼き上げていく。

(7) 種蒔き始めの儀式

(ボンサラー県パクバーン村・ラオ族)

儀礼名 サン・ヘック（祭りの台・始める）

4～5月、焼いた後になるべく畑の下側、川があれば川の近くにティエン・ハイ（小屋・畑）を作って準備を

しておく。畑のフア・ハイ（頭・畑：上側の縁）には、ワン・カン・ピー（鬱金・守る・悪い霊）といって、悪い霊が畑に来ないように鬱金を植える。鬱金は悪い霊を追い払う力があるので、稲を守ってくれる。

①ティエンハイの少し上に、サンヘックを作る。竹を割って平らなマットを編み、4本の足を立てその上に乗せた供物台である。

②サンヘックの所で、豚1頭か鶏1羽を殺す。豚は、生血を採ってサンヘックに供え、肉、内臓は煮て供える。鶏の場合も、生血を採ってサンヘックに供えるが、肉は1羽のまま湯がいて供える。

③「これから種播きをします。よくできますように」とお願いする。

④サンヘックの周りに早稲種、中間種、晩稲の種を混ぜて、3～7株播く。最初に稲を播いた人が、糯種の中に粳の米と一緒に三種類の種を播いたので、今でもそうする。

⑤ドク・ホン・カイ（花・頭・鶏）も播く。ドクホンカイの花が咲くことで稲の魂が集まってくるので、種を播くときには「サンヤブリ県ケンタオにいる糯米の魂も、カシにいる粳米の魂も、ドクホンカイの所に集まって来い」と唱える。

⑥まず、早稲種をフア・ハイに向かって播いて上がる。

⑦中間種をカンクワ（右側の縁）側、ティン・ハイ（下側の縁）側に播く。

⑧晩稲をカンサイ（左の縁）側の上側に播く。このとき播く種の量は、早稲種（20%）、中間種（60%）、晩稲（20%）の割合にする。晩稲が実る最後の時期に雨が降ると、収穫が落ちるので、中間種、早稲種を多くする。（ポンサリー県カナ村・ラオ族）

儀礼名 リヤン・ピー・ハイ（食べさせる・霊・畑）

焼いた後になるべく畑の下側、川があれば川の近くにティエン・ハイ（小屋・畑）を作って準備をしておく。

①戸主は、ティエンハイの近くの上側にラック・ヘック（柱・始める）と呼ぶ、竹の先端を四つ割りにして広げて竹の編みの板を挟んだ台を、鳥が鳴く前に立てる。

②ラックヘックの周りに早稲、中間種、晩稲の種を適当な株播く。ドクダイ（鶏頭の花）の種も播く。鳥から食べられないように鳥が起きる前に播く。

その昔、ドクダイはドク・キン・ホーン（花・香り・良い）と呼ばれていた。ドクキンホーンと稲は兄弟であった。ドクキンホーンは弟で、稲が兄であった。二つともいい香りの花で、一緒に花が咲いたらそれぞれとてもいい香りがした。神様はそれを見て、二つとも残しておくとなんか欲しくなるから、人間は喧嘩をするようになるので、稲だけ少し香りをのこして、ドンキホーンの香りを全部持ってってしまったのでドクダイと呼ぶようになった。だから、この二つはいつも一緒に植えるものである。ドクダイの種は播かなくとも、稲を播いた畑にはひとりでも出てくるもので、稲にドクダイの種が混じっているのであろうという。また、先祖に供える花でもある。



作小屋の周囲に植えられた鶏頭の花 ウドムサイ県
ナムレーン村(カム族)

③鶏を殺して、生血をラックヘックに塗る。さらに調理した鶏の肉と御飯とを供える。これらは、霊に食べさせるという意味である。

④「これから種播きをします。稲がたくさん実りますように」とお願いする。

⑤それが終わったら、人々が畑に種播きをしてよい。

（ポンサリー県ワンサイ村・プノイ族）

儀礼名 ヒャ・ユン・ショー・エニ（畑・家・作る・行く）

①家族のいい日を選んで、種を持って畑に行き、畑の中央にヒャユンを作る。

②さらに、いい日を選んで種播きに畑に行く。

③ヒャユンの上側の底の下に、カビヤ・ラック（竹編みのマット・柱）と呼ぶ、竹の先端を四つ割りにして広げて竹の編みの板を挟んだ台を1本立てる。

④カビヤの上に蒸した糯米の御飯を供え、土の神、水の神に「たくさん収穫がありますように。虫や鼠の害がな

いようをお願いします」と祈る。

⑤カビヤラックの根本の周りに、適当な数株を播く。

⑥ハンバーワツ（鶏頭の花）の種を種糊に混ぜて畑の一面に播く。だいたい、カビヤラックの周りに播く。ハンバーワツは稲の母の花だという。

（ポンサリー県マイソンファン村・プノイ族）

①ヤオコー・ヤチュー（畑・小屋）を畑の中央に作る。

②種播きする前にマイランという竹を4本切って、20㍍四方の隅に立てる。マイランを用いるのは、増殖が早く広い森を作るので、稲もマイランのように増やして欲しいという胃がある。

③ヤコー・ヤチュ（畑・右：右脇の縁）側にツファッ（種播き用の掘り棒）を置く。

④その囲みの中央にバナナの葉を敷き、鶏のゆで卵1個、家鴨のゆで卵1個、マイサンやマイヒヤの竹カップに水1杯、ゴータツという魚1匹、ピソツという川カニ1匹、蒸し御飯（糯でも粳でも可）を供える。鶏の卵はきれいでいつもあるから、稲もそのようであるようにという願である。家鴨は手が開いているので、稲もそのように分葉して欲しいという願である。水は稲が育つためには欠かせないから。ゴータツはいつも卵を産んでいるので、稲もそのように生まれるようにという願である。ピソツは焼いたら黄金に色になるので、稲も黄金色に実るようにという願である。蒸し御飯はこのように豊に食べられるようにというお願いである。

⑤塩、唐辛子、ビンローの材料も供える。

⑥鶏のゆで卵を半分に切って、その殻をヤコー・ウントー（畑・頭：上側の縁）側の2本の竹の柱の頭に被せる。

⑦家鴨のゆで卵1個を半分に切って、その殻をヤコー・ヤートー（畑・足：下側の縁）側の2本の竹の柱の頭に被せる。

⑧その前で、「これから種播きをします。播いた種は全部芽が出るように、1個の種が3本の茎になるように、たくさん雨が降っても流れないように、土地が乾いても種が死ななくて芽が出るように、たくさん収穫がありますように」と祈る。

⑨バナナの葉を畳んで供物を包み、ヤオコーヤチューの所に置く。

⑩その後、4本の竹の囲いの中や周囲に4～5株を種播きする。

⑪ウエーアウエイ（鶏頭の花）も稲の種と一緒に播く。ウエーアウエイは稲の魂を呼んでくれる花で、美しいので集まった稲の魂たちが楽しい気持ちになる花である。

⑫再び囲いの中央にバナナの葉を敷いて、塩、唐辛子、煙草、ビンロースの材料、椎の木の枝葉を供える。椎の木の枝葉は、箒と同じように悪いものを追い出す力があるものである。

⑬「これから稲を邪魔する虫が生まれないように、いろいろの物を食べさせましたので、別の所へ行ってください」とお祈りをし、バナナの葉を畳んで供物を包み、畑の西側の外に捨てる。

⑭その後、人々はヤコーヤートーに並んで、ヤコーウントーに向けて播いて上がる。早稲種はない。この村では、誰かの家が種播きを始めたら、村全部の家の種播きが終わるまで焼き餅をしたり、糊を焼いたり、米を焼いたりすることは許されない。

（ウドムサイ県ホイリアン村・カム族）

儀式名 ロレッ・チャモン・ゴ（始める・穴を開ける・稲）

焼いた後に、畑の中央にチャオ（作小屋）を作っておく。

①チャオの近くの右上の所でプールという儀礼的な聖なる種播きを行う。

②鬱金を植える。

③タレオ（悪霊侵入防除の六ツ目編みの竹マット）を立てる。

④種糊を入れたヤン（竹籠）をおく。

⑤家から連れてきた黒豚を畑で殺し、鬱金、タレオ、種糊にその生血を塗る。

⑥タレオの周りに種糊を数株播く。このとき、マイソツという竹の節やタライン（箒草）の節の中から見つけた種があったら、その種を播く。

⑦この儀式が終わったら畑全体の本格的な種子まきを始める。先ず、早稲の種を小屋から道伝いにカボン・ハレッ（頭・畑：上側の縁）に向けて播いて上がり、引き続いて時計回りに右上半分に早稲を播き、右下半分に中間

種を左下半分，左上半分に晩稲を播いていく。

(ウドムサイ県パクメン村・カム族)

儀礼名 パンストリッ (悪魔払い)

焼いた後種蒔き始めの儀礼をするまでに，畑の真ん中にチョオという作小屋を建てる。これは，畑作業の時の休憩など生活のための小屋であるとともに，収穫時には畑の米倉となる。チャオハレットの中に，三つ石の囲炉裏を作る。

- ①種蒔きを始める日に，チョオの囲炉裏に火を起こす。この日の儀式には妊婦も参加しても構わない。
- ②種籾を入れたベンフツ (籾扱きの腰籠) やヤン (籾運搬用背負い籠) をチョオの真ん中に置く。
- ③薪の中に，壊れた篩とチョルワンという香草を入れて，ラタンの葉で巻いて束にして火を着けて，種籾の上を祓いながら「これから種蒔きを始めます。悪い霊が邪魔をせず，芽が出るようにお願いします」と唱える。
- ④チョオの少し上に鬱金を植えて，水を入れたマイホックの竹の水筒を木の股の杭に立て掛ける。
- ⑤この前で雄の鶏を殺して，その生血を竹の水筒や鬱金，種籾に塗る。
- ⑥竹の水筒の周りにゴクロックという籾殻の白い品種を植える。それがなければゴインムという籾殻の赤い品種を数株播く。ゴクロックを播く時は鶏は籾殻と同じ白い雄の鶏，ゴインムの時は赤い鶏を殺す。何株播くかは決まっていないが，必ず男主人が播く。
- ⑦それが終わったら，人々はチャオハレットの上からカッポンハレットに向けて晩稲を播き上がり，右上側に早稲種を，右下側，左下側，左上側に中間種や晩稲を播いていく。
- ⑧殺した鶏はチョオの三つ石の囲炉裏で調理する。この調理した肉の一部を3つずつ，昼ご飯を食べる時に竹の水筒と鬱金に供える。

(ルアンパバーン県ホイジン村・カム族)

儀式名 レック・チャモン・ハレット (始める儀式・穴を開ける・畑)

焼いた後，畑の中央にチョオ (作小屋) を建てる。

- ①チョオの近くの上側に，早稲，中間・晩稲を1株ずつ女性が播く。
- ②それが終わると，人々はそこからカッポンハレットに向けて中間種を播き上がり，チョオの左上側，左下側に中間種を，右下側，右上側に晩稲を，左回りに播いていく。
- ③早稲種は，左下側の隅からド・ハレット (尻：下側の縁) 沿いに中間種，晩稲とは区別して播く。

(8) 育成促進儀礼

(ルアンパバーン県ホイジン村・カム族)

儀式名 リッ・リアン・プロイ・ハレット (儀式・食べさせる・霊・畑)

種播きした後，1ヶ月くらい経ち，稲が30センチほどに生長したところに行く。

- ①知人と共に2～3人畑に行き，レック・チャモン・ハレットの時，女性が播いた3株の所に，ホー・ハレット (霊の小屋・畑) を建てる。ホーハレットは，マイボン，マイサンという竹で作る。三角の空洞の竹編みの小屋を作り，それを竹の柱の頂上に取り付けたもので，柱の竹の節には下側から削り掛けが施される。
- ③ホーハレットの前で赤い雄の鶏を殺し，生血をホーハレットに塗る。
- ④殺した鶏をチョオ (作小屋) の囲炉裏で調理し，頭，肝臓，足，と御飯，ラオハイ (酒) を1杯をホーハレットに供え，「これらを差し上げますので，ここにいる霊は来て食べてください。稲に悪いことをしないように，稲が良く実るように，我々も病気にならないようにしてください。食べたら畑の外に出て行ってください」と祈る。
- ⑤鶏半分を，三株の稲の所に供えて，トク・マン・ゴ (糸を結ぶ・魂・稲) をする。早稲種，中間種・晩稲それぞれを白木綿の糸で結ぶ。
- ⑥タレーを作り，鶏の生血を塗り，鶏の羽根を付けて，畑の道の出入り口に立てる。これは，悪い霊に食べさせたよという標で，悪い霊が再び畑に入らないようにするためである。

(9) 人間を愚弄する雑草

(ポンサリー県パクバーン村・ラオ族)

ニャーペツという草は焼畑で一番困る草である。この草は、もし俺を抜いて伐り株に乗せてくれたら、俺は馬の背中に乗っているのと同じで気持ちがいいよ、俺を抜いてハーハイ（燃え残りの木）に乗せてくれたら、俺は王様みたいな玉座に座ってような気分だよ」と言って、本当は死ぬくせに何をされても死なないよという人間を馬鹿にする。

(ポンサリー県カナ村・ラオ族)

焼畑の除草は6月に入って1回、その後2回、合計3回行う。焼畑で一番困る草はマッパオという稲の成長を邪魔する蔓性の草で、握り拳大の実が成り、その実を切るとそこから新しい芽が出る。人間が抜いて伐り株の上に乗せると、「馬の背に乗っているようで気分がいい」と言い、コーンハイ（火）に投げ込むと「太陽に当たっているようで気分がいい」と言った。そこで、人間が川に流す「ああ死ぬ」と叫んだ。

(ウドムサイ県ケオ村・カム族)

焼畑の除草は、1回目に稲の芽が20センチぐらいに伸びたころ、2回目に40センチぐらい伸びたころ、3回目にそろそろ穂が出るというところに行く。グツ・トン（伐る・竹の新芽）も行う。一番困る草は、タゴンという節で芽を出して伸びていく草で、ラオ語ではニャーカッピーと呼ぶ。この草は人間をだます。「もし俺を石の上に置いたら花を咲かせるよ。もし伐り株の上に乗せたら実になるよ」と言う。

(10) 稲刈り初めの儀式

(ポンサリー県パクバーン村・ラオ族)

儀礼名 ヘッ・フット・カオ（始める・抜く・稲）

早稲種の稲の収穫を始めるときに行う。

- ①鶏2羽（雄1羽、雌1羽）とローソク2本を持って畑に行く。
- ②種播き始めの儀式の時作ったサン・ヘック（祭りの台・始める）の上に屋根を付ける。
- ③鶏を殺して調理して、雄の鶏をサンヘックの中に供え、ローソクに火を着け、ドクダイ（鶏頭の花）を供えて、畑を守ってくれる土地（畑）の霊に「これから収穫をするので鶏を食べさせます」と唱える。ドクダイは、さまざまな土地にいる稲の魂が集まってくるように供える。
- ④ティエン・ハイ（小屋・畑）をきれいに掃除して、その奥側の半分を米倉にする。
- ⑤ラック・ヘック・ティエン・ハイ（柱・始める小屋・畑）と呼ぶ、割竹で十字型を組みそれに女主人の真新しい巻きスカートを着せ、頭部に竹編みの三角型の小屋を取り付けて女主人の真新しい上着を着せ人形を、ティエンハイの奥の壁に取り付ける。女主人は稲の魂の母である。
- ⑥メー・クアン・カオ（母・魂・稲）と呼ぶ人形を作り、肩の所にパーティア（子供背負い布）と女主人の真新しい上着を着せ、腰の所に女主人の真新しい巻きスカートを着せた上にカタン（収穫用腰籠）を取り付ける。
- ⑦メークアンカオに調理した雌鶏を持たせる。
- ⑧女主人が、ティエンハイのからファ・ハイ（頭・畑：上側の縁）に通じる畑の中の道をファハイまで行き、そこにメークアンカオを立てる。
- ⑨そこで「これから収穫します。稲の魂さんたちよ、たくさん集まってください。」と唱えて、カタンに早稲種の籾を抜いて穫って入れる。
- ⑩道を引き返しなから、途中の稲の穂を摘んで、人の腕の大きさぐらいの束を4束作る。
- ⑪サンヘックの周りに植えてある3～7株の稲の籾を、カタンに抜いて穫って入れる。
- ⑫サンヘックの周りに植えてあるドクダイを採る。
- ⑬女主人がティエンハイに入り、ドクダイをラックヘックの頭の三角の小屋に入れる。
- ⑭4束の穂をメークアンカオの首、両腕、胴部に取り付け、カタンとお酒をその前に供える。
- ⑮女主人は、「稲の魂を呼びます。この米倉にも、家の米倉にも来てください。ラックヘックティエンハイを供えた米倉は、金、銀



米倉に供えられているカタン パクバーン村

の柱で作られた米倉です。ここまで来てください。金、銀で作られた米倉ですよ。食べても減らないように、飲んでも水が枯れないように、食べさせてください。他人にあげても減らないように、先祖にお供えさせてください」とお願いする。

⑭その後、早稲、中間種、晩稲の順に収穫をする。

⑮すべての収穫が終わったらティエンハイの米倉に収納する。

⑯その後、家の米倉に運び入れる。

⑰ティエンハイの米倉の籾をすべて運び終えたら、

ラックヘックティエンハイに掛けた4束の穂の籾を扱き落としてカタンに加える。

⑱そのカタンを家の米倉の籾の一番奥の所に稲の魂として置く。これは、翌年に同じように祀ってからでないと食べることが出来ない。種籾にする

ようなことはない。

(ポンサリー県カナ村・ラオ族)

儀礼名 ヘッ・フット・カオ(始める・扱く・稲)

①ティエンハイの奥側の半分を、米倉にするためきれいに掃除する。

②収穫した早稲の稲をティエンハイに最初に運び込む前に、ラックヘックナイティアンと呼ぶ、竹編みの台を作って米倉の奥の壁の所に置く。

③さらに、エ・メー・クアン・カオ(飾り物・母・魂・稲)と呼ぶ、女主人の着物やパピアン(肩掛け)を着せた人形を、ラックヘックナイティアンの横に置く。

④早稲が実ったら収穫して、竹マットの上でも実を落として、ティエンハイの米倉に収納する。

⑤中間種が実ったら収穫して、竹マットの上でも実を落として、ティエンハイの米倉に収納する。

⑥晩稲が実ったら収穫して、竹マットの上でも実を落として、ティエンハイの米倉に収納する。

⑦畑の米倉から家の米倉に最後の籾を運び込むときに、エメークアンカオも運んできて家の米倉に入れる。特に食べ始める儀礼はない。

(ポンサリー県ワンサイ村・プノイ族)

①早稲種、中間種、晩稲の順に刈り穫り、それぞれを竹マットに置いておく。

②豚があれば豚1頭、鶏の場合は1羽(雌雄は関係ない)をカビヤラックの所で殺し、生血はカビヤラックに塗る。

③調理をして肉をカビヤラックに供える。

④その後、「刈り穫ってある稲を増やしてください」と言って、マットの上の籾を脱穀する。

⑤脱穀したら袋に入れて家の米倉まで運ぶ。カビヤラックはそのままにして畑に残しておく。

⑥家の米倉には、奥の方に皿に蒸した糯米の御飯を供える。

(ポンサリー県マイソンファン村・プノイ族)

儀式名 スー・クーヌー・プークー(石・赤い絹糸・魂)

稲の全体がまだ黄金色になる1週間ぐらい前(収穫の1週間前)に行う。

①家で、ホフー(竹編みの円形食台)の上に、湯がいた鶏(赤いきれいな雄)1羽、川から拾ってきた小石2個、マイワンという竹の枝の小さな水筒2本(1本はお茶、1本は焼酎)、赤い絹の糸玉1個、赤い木綿の糸玉1個、女主人の首飾り、耳飾り、腕飾りなどと、チューオールー(ガラスコップ大の竹籠)1個、手の平大の黒布、赤布1枚ずつを供える。

②「スークーヌー・プークーの台も用意しました。スークーヌー・プークーのお祭りをしますのであなた方霊も逃げないでください」と祈る。

③その後、チューオールーの中に、スークーヌー・プークーの祭りで供えた、川から拾ってきた小石2個、マイワンという竹の枝の小さな水筒2本(1本はお茶、1本は焼酎)、砂糖黍の先端部を2本入れて、赤い絹の糸でチューオールーの外側を1周巻く。このチューオールーは畑の数だけセットで準備する。

④これを持って畑に行き、ヤオコーヤチュー(作小屋)の上側の4本の竹の囲いの所に儀礼的に種播きした稲の穂を、2~3株集めてチューパーコチューを包んで、赤い絹糸で束ねる。この時、男は9周り巻き、女は7周り

巻く。

儀礼名 フーシーシアージャグ（新米を食べる儀礼）

スークヌープークーから1週間後に行う、先祖に新米を食べさせる儀礼である。

- ①それぞれの畑から稲の穂1本ずつと、胡瓜、南瓜、里芋、薩摩芋、キャッサバなど畑に作った作物を穫ってくる。
- ②新しい穂から1,2粒取って皮を剥いて、古い米に混ぜて御飯を作る。
- ③野生の鶏、豚か鶏の肉（調理した肉）、果物を準備し、家の奥の壁の所に台を置き、その上に畑から穫ってきたもの、新しい米の混じった御飯とともに供える。
- ④「我々が畑に植えたものが収穫できました。先ず先祖の皆さんが食べてください。その後我々は食べます。その代わりに、我々が病気にならないように守ってください」とお願いする。フーシーシアージャグを終えないと稲を収穫することは出来ない。

儀式名 ヤオコー・コラー・クーエクー（畑・稲の魂・呼びに行ってくる。）

- ①刈り穫った稲は何カ所かに集めておく。
- ②すべてを刈り取ったら、4本の竹の囲いの所に儀礼的に種播きした稲の穂2~3株を集めてチューパーコチューを包んで赤い絹糸で束ねておいたものを切り取って、その後脱穀を始める。
- ③刈り穫った稲の集めてある箇所ごとに、竹マットを敷いて脱穀するが、そのたびごとにチューパーコチューを包んだ稲の束を移し、最後に脱穀した竹マットの上でチューパーコチューを包んだ稲束の籾を落とす。
- ④脱穀がすべて終わったら、「収穫も終わりました。これから村の籾の家に運んで行きます。あなたは、畑にいるときには雨にあたり、雷にあたり、太陽の日射しで暑かったりして、びっくりしたことでしょう。これからは、そんなときも安全な家に連れて行きます」と言って、籾を家の米倉に運んでくる。その時にチューパーコチューや竹マットなど道具類も運んでくる。
- ⑤全部の稲を米倉に運び込んだら、茹でた鶏の卵、手の平大の黒布、赤布それぞれ1枚、女主人の首飾り、耳飾り、腕飾りを準備する。卵の数は畑が1箇所の場合は1個、2箇所の場合は3個、それ以上は1箇所につき1個増やす。
- ⑥家の奥にスークヌープークーで用いたホファー（竹編みの円形食台）を準備して、その上に卵は皿に入れ、手の平大の黒布、赤布それぞれ1枚、女主人の首飾り、耳飾り、腕飾りを供える。
- ⑦その後、布袋に卵（1個は残す）と女主人の首飾り、耳飾り、腕飾りを入れる。
- ⑧畑を順番に廻って、稲の魂を呼んでくる。畑どおしが離れすぎていたら代わりの人を立てて行ってもらう。
- ⑨その間に、卵1個、手の平大の黒布、赤布それぞれ1枚が残っているホファーを、米倉の中に運び込む。
- ⑩稲の魂を呼びに行った人が帰ってきたら、持っていった布袋もホファーの上に供える。
- ⑪夕方、家鴨か鶏か豚を殺して料理して、ホファーの上に供える。殺す動物は、去年鶏を殺して供えたら今年は収穫があったのでまた今年も鶏をとるか、去年豚を殺して供えたら今年は収穫が少なかったから今年も鶏か家鴨にしようという具合に、それぞれ家ごとに決める。
- ⑫「収穫もすべて終わりました。稲の魂も皆来てくれました。これから、お供え物をして食べさせて差し上げます」と唱える。
- ⑬チューオールーに糸を巻いて、米倉の籾の上に置く。

（ウドムサイ県ホイリアン村・カム族）

儀礼名 ヒツ・ホツ・ゴ（儀礼・扱く・稲）

- ①早稲が実ってきたころ、よい日を選んで畑に行き、家の奥さんが務めるマ・ゴ（母・稲）が、美しく着飾って、チャオ（作小屋）をきれいに掃除をし竹のマットを敷く。チャオ内部や外壁をラングロン（鶏頭の花）を中心とした花で飾る。
- ②マ・ゴ（母・稲）が、作小屋の中にタンアイ（竹マット）を敷く。
- ③マ・ゴ（母・稲）がジュアン・ハレッ（尻・畑：下側の縁）とゲム・ハレッ（脇・畑）の3箇所の入口にスナラルゴール（竹の門）



家の米倉の籾に供えられたチューオールーと宝物
マイソンファン村

を立てる。

マ・ゴ（母・稲）が、タレオの所に花で飾ったベンホッ（稲を扱って収穫する腰籠）とベンヤン（収穫した稲を運ぶ背負い籠）を置く。

④マ・ゴがベンホッを腰に付け、タレオの周りに植えてある稲のうちから3株の稲を束ねて、その中の3本の穂を抜き穫る。

⑤その後、畑の右上側の一番下の列の穂をベンホッで三杯扱ってベンヤンに入れて、チャオに運び込む。その後、畑の右上側を他の人々が抜き穫ってよい。人々は上側から抜き穫るが、マ・ゴは畑の右上側の下の縁の列を抜き穫る。これは、マ・ゴが皆の稲刈りを支えるのだと言い、右下側、左下側、左上側を収穫するときも同じである。

⑥右上側を刈り終わり右下側に移る際には、右上側と右下側の稲1株ずつを一つに束ねて穂を抜き穫らなければ、移動することはできない。これは、左下側、左上側を収穫するときも同じである。収穫の最後はタレオの所で終わる。

⑦ヒツ・ホッ・ゴを行う1日間は、畑の中に妊娠している女性は入ることが許されない。

⑧一日目の作業が終わって畑を出るときは、スナルゴールを抜き取って外に出て、再び立てて家に帰る。翌日は抜き取って畑に入り、それを立てて収穫作業を行う。

（ウドムサイ県パクメン村・カム族）

儀礼名 パアンクンプラッ

①まず、チャオをきれいに掃除をし、中に竹マットを敷く。

②竹マットの上にベンホッとヤンを置く。

③テハッ（竹編みの板）を作り、その上に唐辛子、ビンローズの原料、煙草を供える。これを壊れたム（竹製の浅底篩）の上に乗せて火を着け、小屋の中や竹マット、ベンホッ、ヤンにかざして廻りながら「これから稲刈りを収穫します。たくさん収穫がありますように」と唱える。

④鬱金の所で種蒔きの時と同じように鶏を殺して、生血を採って竹水筒や鬱金に塗ったりする。また、テレー（タレオ）を2本作り鶏の生血を塗って、チャオの入口と畑の入口に立てる。この日から3日間妊婦は畑に入ることが許されない。

⑤チャオの右側に、ロック（ゴミ捨ての竹の囲い）、皆が座る竹マット、三つ石の囲炉裏を、村へ通じる畑の中の道沿いに作る。この順番を守らないと、ローイ（稲の霊）が怒って蛇や百足を出してきて人間を咬ませる。

⑥この日はチャオの中で火を焚くことも許されないのので、殺した鶏は三つ石の囲炉裏で調理をする。ここで調理をしないと、ローイ（稲の霊）が怒って蛇や百足を出してきて人間を咬ませる。

⑦家の主婦が務めるマンゴ（稲の魂：稲の母）が、ベンホッとヤンの背にチョルワンという香り草を付ける。これは、稲を守っているローイ（稲の霊）がこの草を付けることを望んでいるからである。

⑧マンゴが、竹の水筒の廻りに植えた稲の穂のうちの3本をまとめて、「これから収穫します。コンゴ（稲の魂：稲の子供）もいっぱい集まってください」とお願いしながら、ベンホッの中に1回で抜き穫る。

⑨マンゴが抜き穫った後は、人々は畑の右上側の上の縁から抜き穫るが、マンゴは畑の右上側の下の縁を、3本の穂を抜き入れたベンホッの中に抜き穫る。人々は、チャオの右上、右下、左下、左上側の順に時計回りに収穫していく。

⑩マンゴは、抜き穫ったベンホッ3杯の籾をヤンに入れる。このときチョルワンという花、ラメン、ラボーン、ラマツ、トンボという葉っぱ、シロアリの巣の頂上の土一塊り、一握りの糯御飯を、トゥックアンという蔓で一束に巻いたものも一緒にヤンに入れて、米倉の竹マットに一番最初に置く。この束をガボン・ゴ（頭・稲）と呼ぶ。

⑪収穫が終わって、畑の米倉から家の米倉に運ぶ前に、家でガボンゴを作る。

⑫マンゴが最初に畑の米倉から家に運んでくる。



チョルワンを付けたベンホッ(左)とヤン(右)

パクメン村

⑬マンゴは家で御飯を食べる。

⑭マンゴは、ガポングを米倉の竹マットの中央に置いて、その上に畑の米倉から運んできた籾を被せる。

⑮それが終わったら、他の人々も畑の米倉から家の米倉に籾を運んでもよい。

(ルアンパバーン県ホイジン村・カム族)

儀礼名 リッ・プ・マメ (儀礼・食べる・新米)

①本格的に刈り始めの儀礼をする前に、畑の中間種 (又は早稲種) の籾をベンホッで3杯扱き穫る。

②その籾を蒸して、天日に干して乾燥させ、再び蒸して白で搗いて精米する。これをカオハーンと呼ぶ。

③小さな鶏を殺して料理して、家族が食べる前にカオハーンと共に先祖に供えて「今日は新米を収穫しました。食べてください」と言って食べさせる。

④家族全員で食べる。

儀礼名 リッ・ホッ・ゴ (始める・扱く・ゴ)

①畑の中間種 (又は早稲種) を本格的に収穫し始めるときに行う。チョオをきれいに掃除をして畑の米倉にする。

②畑の出入口のタレオを立てて、他の家の人が畑に入らないようにする。

③チョオの中に竹マットを敷く。

④奥の壁に十字の人形を立て、頂点にタレオを付けて、マゴ (家の女主人) のきれいな首飾りや着物を付け、その根元に32種類の草や木の葉を飾る。その名前は忘れてしまった。⑤お昼に、野生動物 (鹿や鳥) が鳴かない瞬間を見計らって鶏を殺す。

⑥その生血をマットや人形にも塗り、「これから収穫をしますので、米の魂よ、私たち (男主人と女主人) の畑に集まってきてください。霊に稲を取られないようにお願いします」と祈る。

⑦男主人と女主人とが鶏を料理して、御飯、鶏の肉を少しずつ持って米倉の中に入り、人形の前に供えてから食べる。この時は、男主人と女主人以外の人の中には中に入ってはならない。大きい声を立てると稲の魂が恐がって逃げるので、米倉の中では小さな声で話をしなければならない。

⑧夫婦2人が、野生動物中でも鹿と野生の鶏が鳴いていない時を見計らって、急いで3つのベンホッを手にする。野生の鹿と野生の鶏は、稲の魂が恐がるからである。しかし、トウンプルという野生の鳥が鳴くと、大変吉報で稲の魂がたくさん来ているので、稲がたくさん穫れる。

⑨夫婦2人は、ベンホッ3杯の籾を扱き穫ったら、米倉の竹マットの上に納める。

⑩その後人々が畑の籾を扱き穫る。

⑪畑の米倉から家の高倉に籾を運び込む前には、鶏頭の花を家の米倉の入り口に飾る。鶏頭の花は、種蒔きの時にチョオの近くに種を播く。

(11) カオハン (青米の焼米)

(ポンサリー県パクバーン村・ラオ族)

①カオマオ

未だ青い籾を穫ってきて、大きな鍋で炒って、踏み臼で搗いて、ドン・ファッ・カオ (浅底平箆・簸る・米) して、そのまま食べる。収穫初めの儀礼をする前であるので、黙って泥棒するという。甘くて、香りがよいのを好んで作る。

②カオハーン

カオマオよりも後で、やはり収穫初めの儀礼をする前の未完熟の青い籾を穫ってきて、蒸して、天日に干して、ドンファッカオをして、再び蒸して食べる。香りがよい。籾を穫って蒸して保存しておく、浮きになっても香りがよい。好きな人は50~100キログラムくらい作って保存する。

(ポンサリー県カナ村・ラオ族)

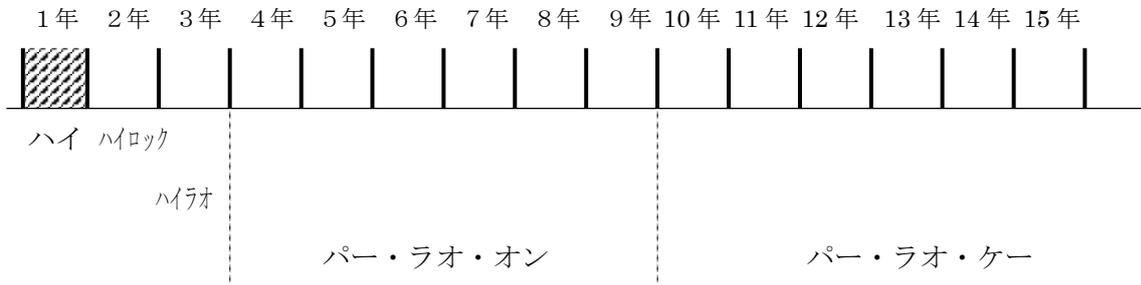
①カオペツ

収穫初めの儀礼をする前に、早稲種の青い籾を穫ってきて、大きな鍋で炒って、踏み臼で搗いて、ドン・ファッ・カオ (浅底平箆・簸る・米) して、そのまま食べる。

3 焼畑その後—再生過程の森への眼差し

(ポンサリー県パクバーン村・ラオ族)

①休閑地の呼称と利用



ア ハイ・ロック (畑・引き抜く)

2年目の呼称。2回目をやる(畑にする)という意味で、どこか別の村から移ってきた人が、畑を伐るのが間に合わなかった時に、去年の畑の跡を借りて畑にする。稲、トウモロコシ、里芋などを栽培する。

イ ハイラオ

3年目の畑の呼称。まだ所有者がいるよという意味で、そこを畑にしたいという人は、そこを畑にした人の承諾を得なければならない。

ウ パーラオオン (若い森)

4～9年目の跡地。若い森という意味で、そこからは、マイコン(12～3, 4月)、マイヒヤ(6～8月)、マイホック(6～8月)などの竹の子やパクニヤイ(蕨)、ニョッフワイ(藤の新芽の芯)、パクナオ、パクファン、パク・ピィヤ・ファン(野菜・小腸に入っている苦い汁・鹿)、ドクケーファー(木の花)などの野菜類が、5月から8月にかけて収穫できる。また、マクルアー(木の幹や枝になる実)、マクモアー(大きな木の実)なども野菜として収穫する。

さらに、ヘッタープツ(6～9月)、ヘッデー(7～9月)、ヘッサモッド(7～9月)、ヘッセッド(7～9月)、ヘッポ(7～9月)、ヘッターン(7～9月)、ヘッサヌーン(7～9月)、ヘッコンカイ(7～9月)などのペツ(茸)類も収穫できる。

このパーラオオンからは、竹細工の材料以外にも建築用材として竹類を利用する。特に、マイヒヤ、マイホックは、建築用材としてよく用いられる。マイコンは舟を操縦するの棹などに用いる。

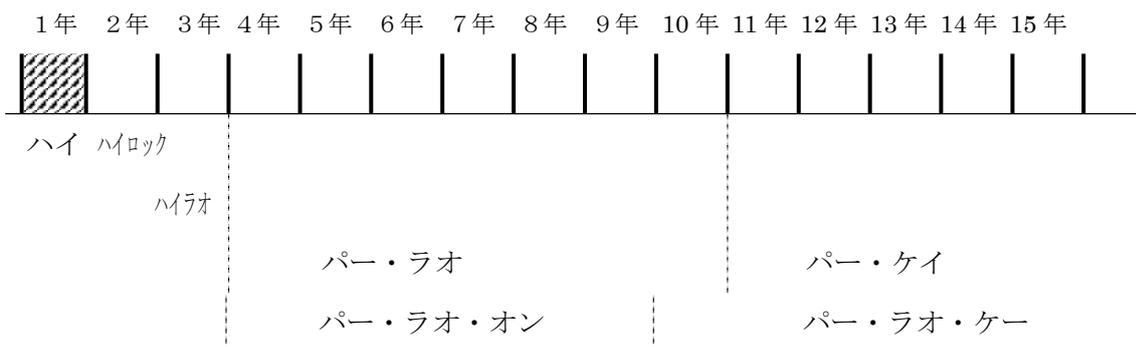
屋根葺き材料としては、ワイ(藤)の葉を用いる。マイヒヤは壁材に用いる。

エ パーラオケー (年取った森)

10年目以降の森で、年取った森の意味で、再びハイに伐ることが出来るくらいに再生した森の意味である。屋根葺き材料としてマイヒヤを取って利用する。建築材としての木は、柔らかい木の場合は20年くらい、堅い木の場合は30年くらいしないと利用できない。

(ポンサリー県カナ村・ラオ族)

①休閑地の呼称と利用



ア ハイ・ロック (畑・引き抜く)

2年目の呼称。2回目をやる（畑にする）という意味で、畑にしなければ、ハイラオと呼ぶ。

イ ハイラオ（畑，若い）

3年目の畑の呼称。

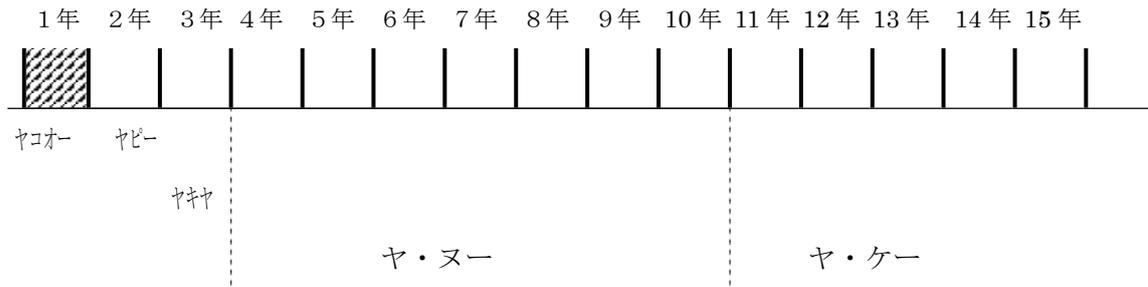
ウ パーラオオン（若い森）

4～10年目の跡地。若い森という意味。

エ パーケイ（年取った森）

11年目以降の森で、年取った森の意味で、再びハイに伐ることが出来るように再生した森の意味である。
（ポンサリー県マイソンファン村・ラオケー族）

① 休閒地の呼称と利用



ア ヤビー

2年目の呼称。畑に利用してもしなくても良い。

イ ヤキヤ

3年目の畑の呼称。ヤヌーより少し若いという意味で、ここからは竹の子だけを取って食べる。

ウ ヤヌー（若い森）

4～10年目の跡地。若い森という意味で、そこからは、竹の子，畑の柵の柱や，家の壁板，竹細工の材料の竹類を取る。畑には出来ない。

エ ヤケー（年取った森）

11年目以降の森で、年取った森の意味で、再びハイに伐ることが出来るように再生した森の意味である。

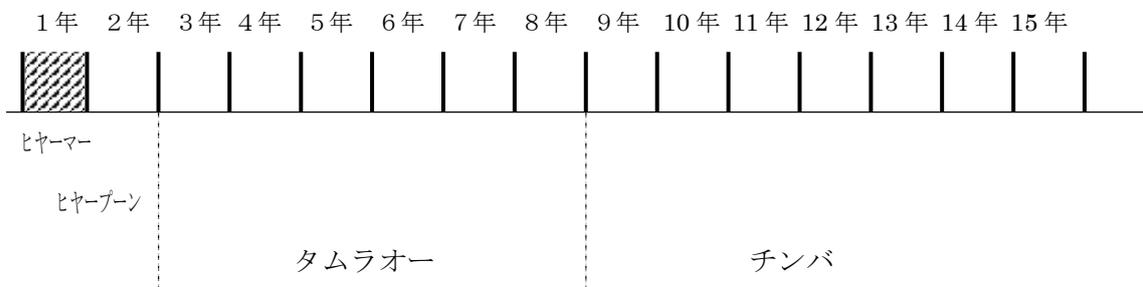
② 再生過程の森に関する諺

ヒヤポー シア ヤポー シヌ

蜂の巣は7日，畑の巣は7年：蜂の巣は7日経つと蜂蜜が採れる。ヤポーは7年すると再び畑に出来るという意味である。ヤポーとは，3年目の跡地を表すヤキヤと同じ意味である。

（ポンサリー県ピエンサイ村・プノイ族）

① 休閒地の呼称と利用



ア ヒヤマー・プーン（畑・古い）

2年目の呼称。畑に利用してもしなくても良い。

イ タムラオー（小さい森）

3～8年目の畑の呼称。

ウ チンバ（大きい森）

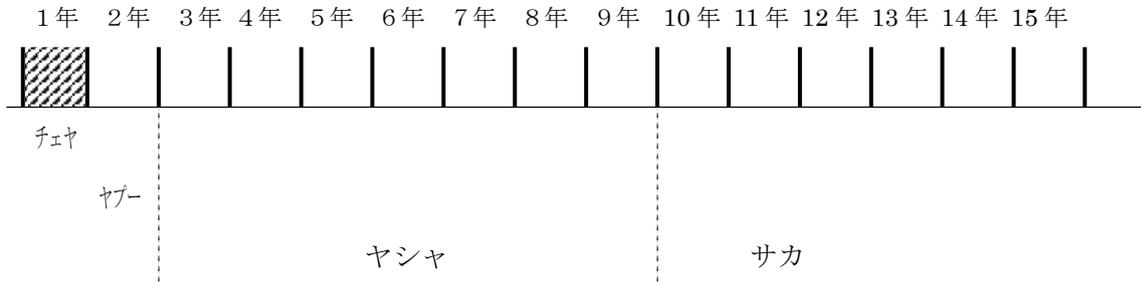
モノと情報

9年目の以降の跡地。畑には出来ない。

エ ヤケー（年取った森）

11年目以降の森で、年取った森の意味で、再びハイに伐ることが出来るように再生した森の意味である。
（ポンサリー県ピツジェマイ村・アカ族）

①休閑地の呼称と利用



ア ヤプー

2年目の呼称。

イ ヤシヤ

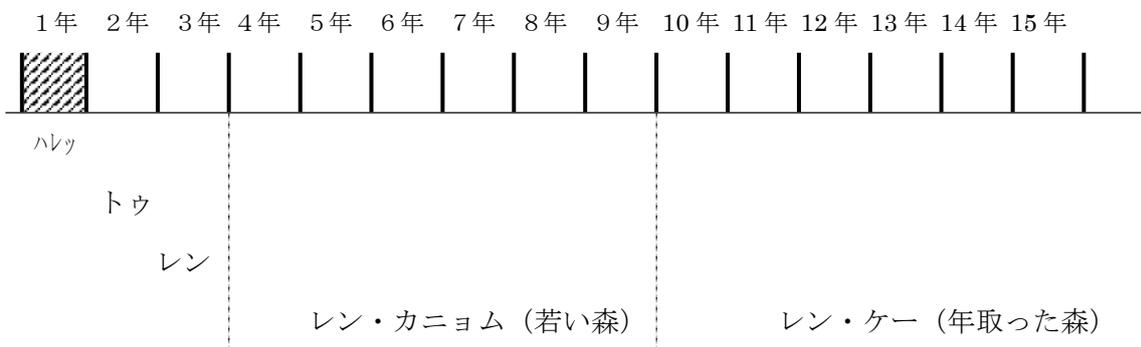
3～9年目の畑の呼称。

ウ サカー

10年目の以降の跡地。再びチェヤに伐ることが出来るくらいに再生した森味である。

（ウドムサイ県ナムレーン村・カム族）

①休閑地の呼称と利用



ア トウ

2年目の跡地の呼称。レンケーを伐ってとても良くできたら、このトゥも再度畑にする。

イ レン

3年目の跡地の呼称。畑にすることは無い。

ウ レン・カニョム（若い森）

4～9年目の跡地。竹の多い土地は4～8年目でレンケーに再生する。

エ レン・ケー（年取った森）

10年目の以降の跡地。再びハレッに伐ることが出来るくらいに再生した森味である。木の多い森だとレンケーに再生するのに12年くらいかかる。

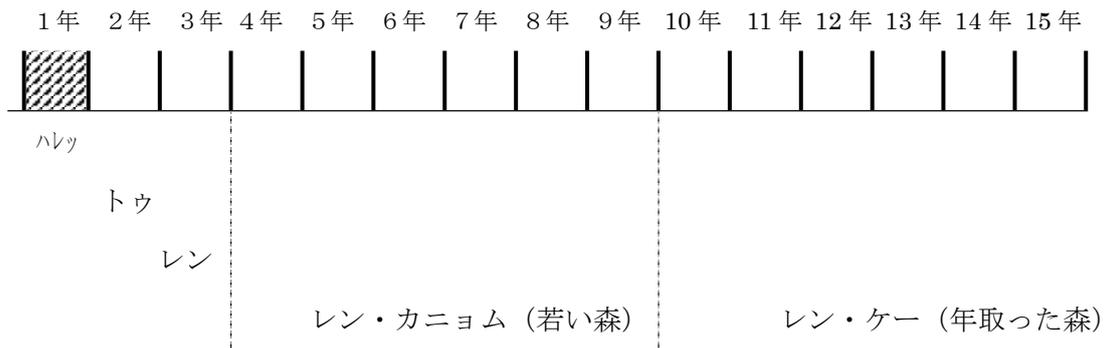
（ウドムサイ県サナンピー村・カム族）



ハレッ(手前), レンカニョーン(谷向下), プリケー(谷向上)

ウドムサイ県ナムレーン村・カム族

①休閑地の呼称と利用



ア トゥ

2年目の跡地の呼称。レンケーを伐ってとても良くできたら、このトゥも再度畑にする。イ レン

3年目の跡地の呼称。畑にすることはない。

ウ レン・カニヨム (若い森)

4～9年目の跡地。

エ レン・ケー (年取った森)

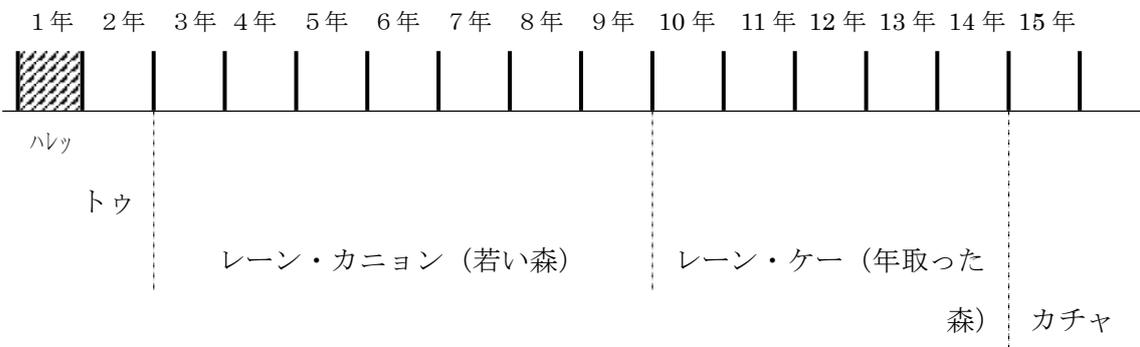
10年目の以降の跡地。再びハレツに伐ることが出来るくらいに再生した森味である。木の多い森だとレンケーに再生するのに12年くらいかかる。

オ サオンナム

これまで伐ったことのないとても大きな森。

(ルアンナムター県チャルンスツ村・カムクエン族)

①休閑地の呼称と利用



ア トゥ

2年目の跡地の呼称。レンケーを伐ってとても良くできたら、このトゥも再度畑にする。イ レン・カニヨン (若い森)

4～9年目の跡地。この森からは、竹の子をはじめとして、5～7月の時期には、ティーモイ (5～7月)、ティータワン (5～7月)、ティートルーン (5～7月)、ティートゥク (5～7月)、ティーカ (5～7月) などのティー (茸) 類が、5～7月の時期には、ラックンパーイ、クンパーン、ラックリン、ラニョネー、ラカンタターなどの茸類も採れる。その他には、ラ (野性の野菜) としてラタウエイ、ラブンペツ、ラワンなどが採れる。

エ レン・ケー (年取った森)

10～14年目の跡地。

オ カチャ

15年目以降の跡地。この森に再生しないとハレツには伐ることは出来ない。この前の森だと畑に雑草が出て



レンカニヨン(左下: 3年目, 右上奥: 5年目) とカチャ(周囲) チャルンスツ村

きて稲が良くできない。

カ クット

20年以上経った森で、まだ伐ったことがない年取った森。この森を伐った方がカチャよりも畑によい。

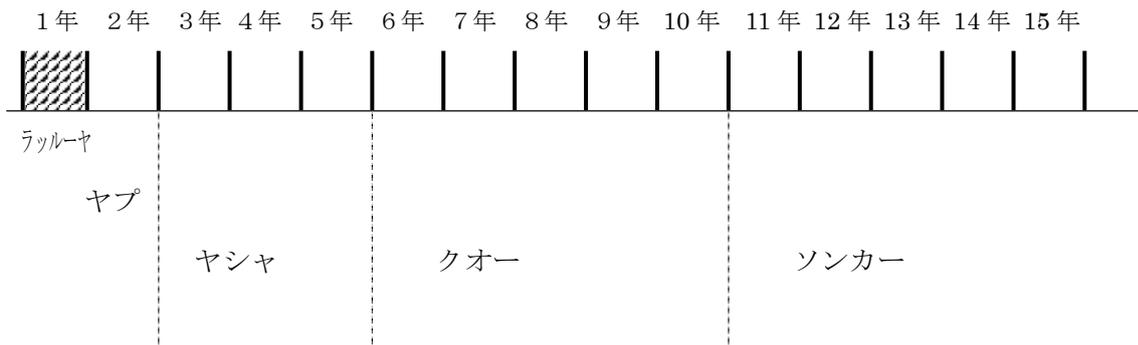
②竹の森の利用に関する諺

ニャンヌン・プツ・ポー・マー ニャンタオ・シツ・ポー・ヨー（若いとき・食べる・と・御飯 年取ったとき・寝る・と・人）
（ウドムサイ県ウーラマイ村・アカ族）



クットとレーンカニョン(6年目)
チャルンスック村

①休閑地の呼称と利用



ア ヤブ

2年目の跡地の呼称。

イ ヤシャ

3～5年目の跡地の呼称。普通は畑にすることはないが、標高の低い川の近くは、竹が多く水分があり森の再生が早いので、5～7年目の時期になると再び畑に出来る。

ウ クオー

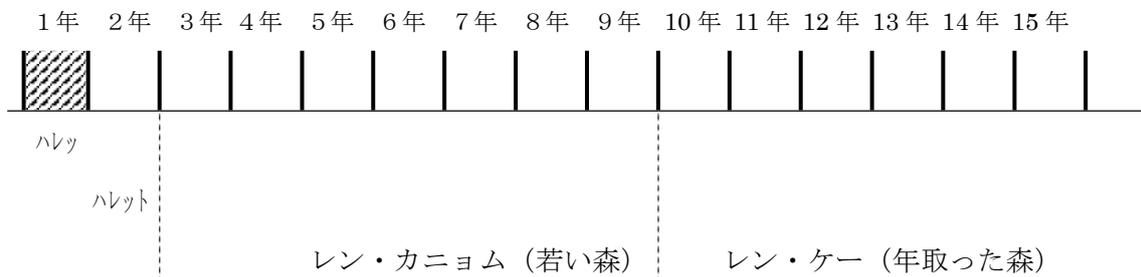
6～10年目の跡地。8年目に入ると再びラッルーヤに伐ることが出来る。

エ ソンカー

11年目の以降の跡地。標高の高いところは水分が少ないので、この期間まで待たないと再びラッルーヤに伐ることが出来ない。

（ウドムサイ県ナムコンム村・カム族）

①休閑地の呼称と利用



ア ハレット

2年目の跡地の呼称。レンケーを伐ってとても良くできたら、このトゥも再度畑にすることがあるが、余り耕さない。この期間にここから採れるものには、ティーモー、ティートックなどのティー（茸）類や、トゥパーンラハン、トゥパーンスック、トゥパーンタネック、トゥパーントウラー、トゥパーンチャー、トゥパーンプライなどのトゥパーン（竹の子）類がある。それ以外に、ラウンブルンやラチュンケツなどの焼いて食べる木の新芽もある。

イ レン・カニョム（若い森）

3～9年目の跡地。最後の9年目からは、再びハレツに出来る。この期間にここから採れるものには、ハレツ

トウで採れたティー（茸）類やトウパーン（竹の子）類以外に、ラウンブルンやラチュンケッなどの焼いて食べる木の新芽がある。4年目以降は、竹細工の材料にする竹を採る。

ウ レン・ケー（年取った森）

10年目以降の跡地。再びハレツに出来る。家の壁板や柱は、20年くらい経った森から採る。

エ レン・ドン

これまで伐ったことのない森。

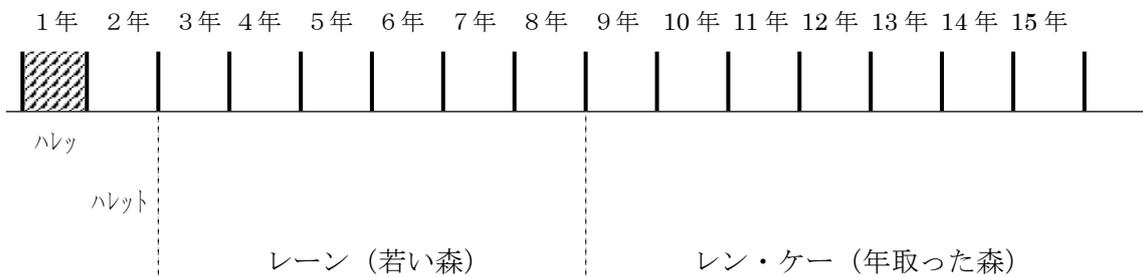
②竹の食べ方に関する諺

ニャンムカニヨム・プ・セ・マ ニャンムケー・プ・セ・シー（若い年の時・食べる・と・御飯 年取ったとき・食べる・と・煙草：竹の子の時は御飯と一緒におかずとして食べ、年取った竹は、竹の歯ブラシにして歯を磨く）

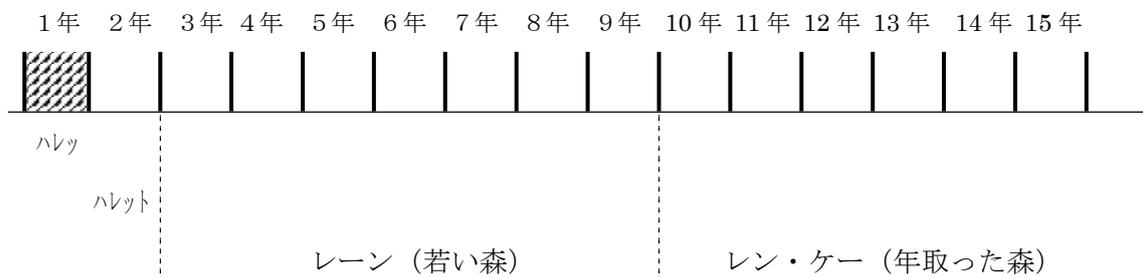
（ウドムサイ県ケオ村・カム族）

①休閑地の呼称と利用

川沿いの低い所



高い尾根沿いの斜面



ア ハレットウ

2年目の跡地の呼称。

イ レーン

高い尾根沿いの斜面の所では、霧が出て水分が多いため土が良いので3～8年目の跡地。逆に、川沿いの低い所は、最後の9年目からは、土地が乾燥して水分がないので3～9年目の跡地。この期間にここから採れるものには、ティーモイ、ティートックサル、ティートウルー、ティークロックなどのティー（茸）類や、パンチャッ、パンプライ、パンタネック、パンチュック、パンラハーン、パンタラー、パンチョイなどのパン（竹の子）類がある。それ以外に、ラウンブルンやラチュンケッなどの焼いて食べる木の新芽もある。

ウ レン・ケー（年取った森）

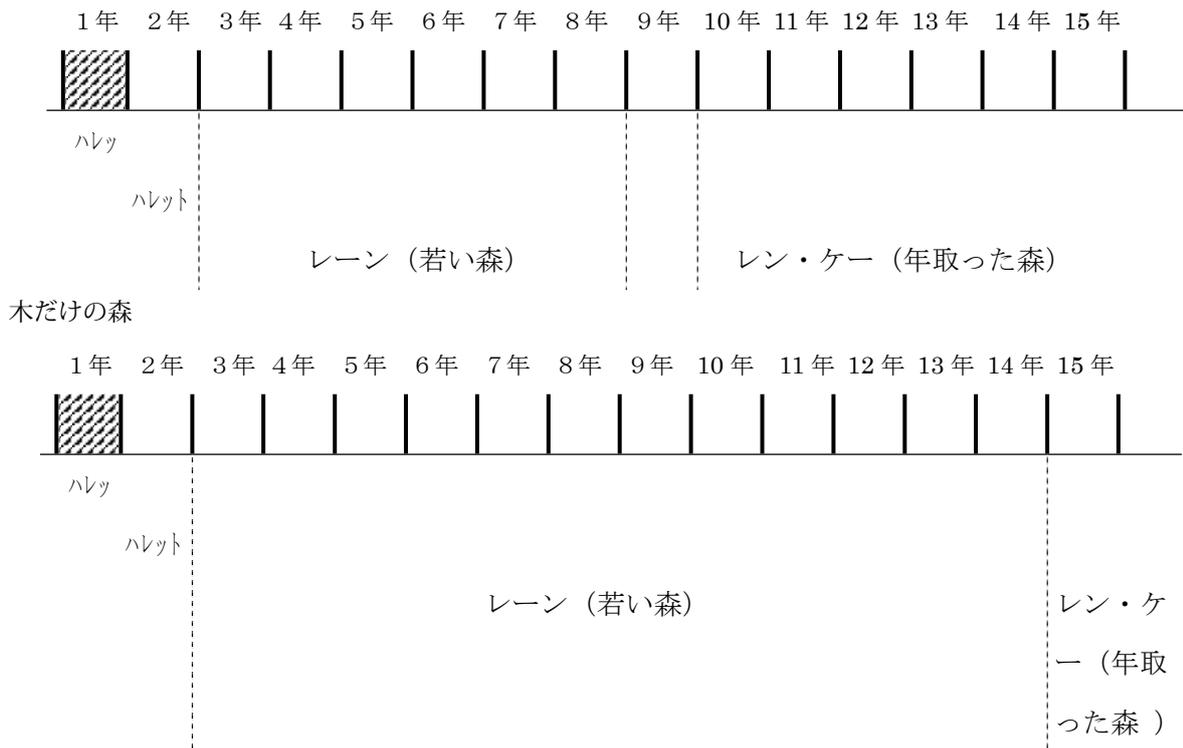
高い尾根沿いの斜面の所では、切りがでて水分が多いため土が良いので3～8年目の跡地。9年目以降の跡地。再びハレツに出来る。逆に、川沿いの低い所は、最後の9年目からは、土地が乾燥して水分がないので10年目の以降の跡地。

（ウドムサイ県ホイリアン村・カム族）

①休閑地の呼称と利用

竹混じりの森

モノと情報



ア ハレットウ

2年目の跡地の呼称。

イ レーン

竹混じりの森では、3～8, 9年目の跡地。木だけの森は3～14年目の跡地。

ウ レン・ケー (年取った森)

竹混じりの森では、9～10年目以降の跡地。木だけの森は15年目以降の跡地。再びハレツに出来る。

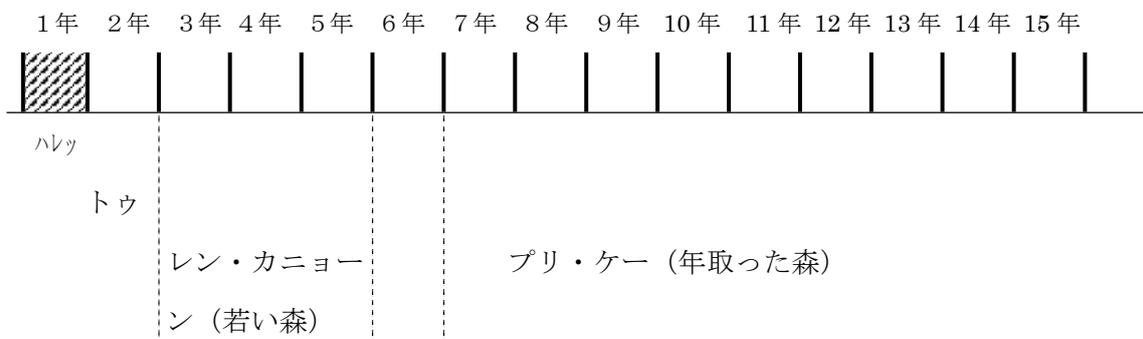
エ クツ

まだ伐ったことのない森。背丈が高く太さも大きい森だから、竹は背丈が低い森を伐ると、竹がたくさん出てくる。木は竹と同じ高さを越えると成長が早くなり日陰を作るので、竹は小さくなっているが、木を伐ると大きく成長する。

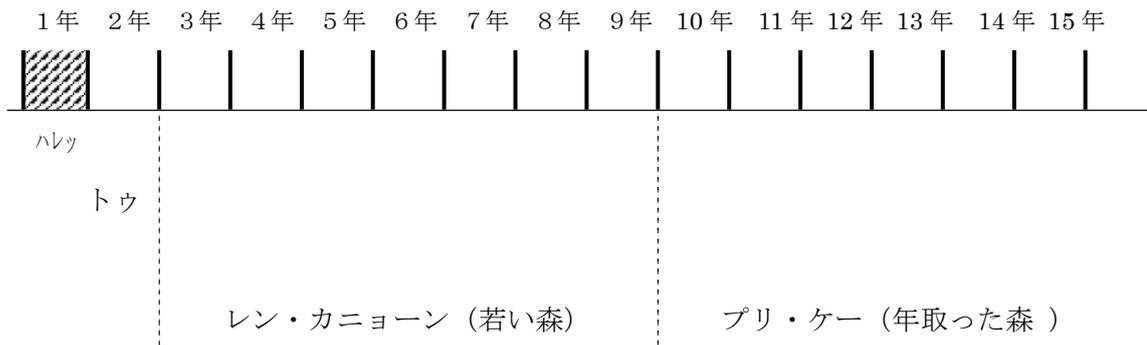
(ウドムサイ県パクメン村・カム族)

① 休閒地の呼称と利用

竹混じりの森



木だけの森



ア トウ

2年目の跡地の呼称。

イ レン・カニョーン

(若い森)

竹混じりの森では、3～6, 7年目の跡地。木だけの森は3～9年目の跡地。この期間にここから採れるものには、ティー(茸)類や、タパーン(竹の子)類がある。それ以外に、焼いて食べるブロン(籐の新芽の芯)もある。竹細工の材料は、5年以上のものを利用する。

ウ プリ・ケー (年取った森)

竹混じりの森では、6～7年目以降の跡地。木だけの森は10年目以降の跡地。再びハレツに出来るが、竹混じりの森も10年を待ってハレツにする。

エ プリクッ

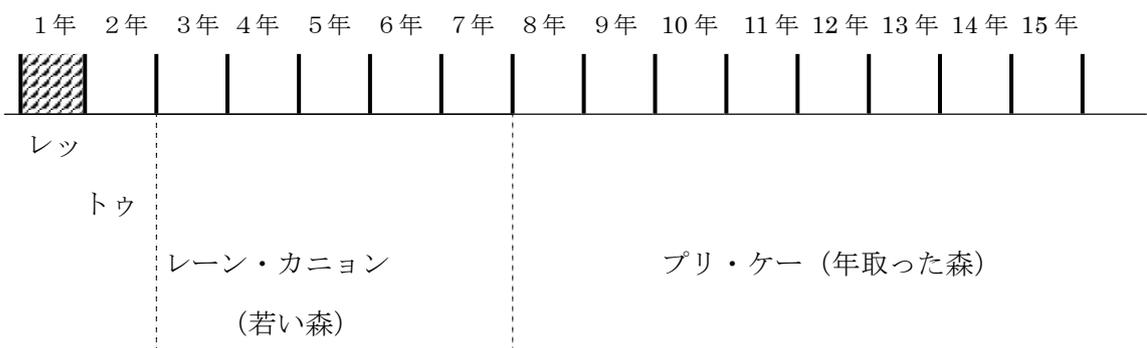
まだ伐ったことのない森。

②竹の食べ方に関する諺

ニヤムカニョーン・イ・プ ニヤムケー・テン・サオンカン (若い年の時・我々・食べる 年取った時・作る・家の建材：竹の子の時は食糧として食べる。年を取って成長したら建材として家を作る)

(ルアンパバーン県ハッサプーイ村・カム族)

①休閑地の呼称と利用



ア トウ

2年目の跡地の呼称。

イ レン・カニョーン (若い森)

3～7年目の跡地。

ウ プリ・ケー (年取った森)

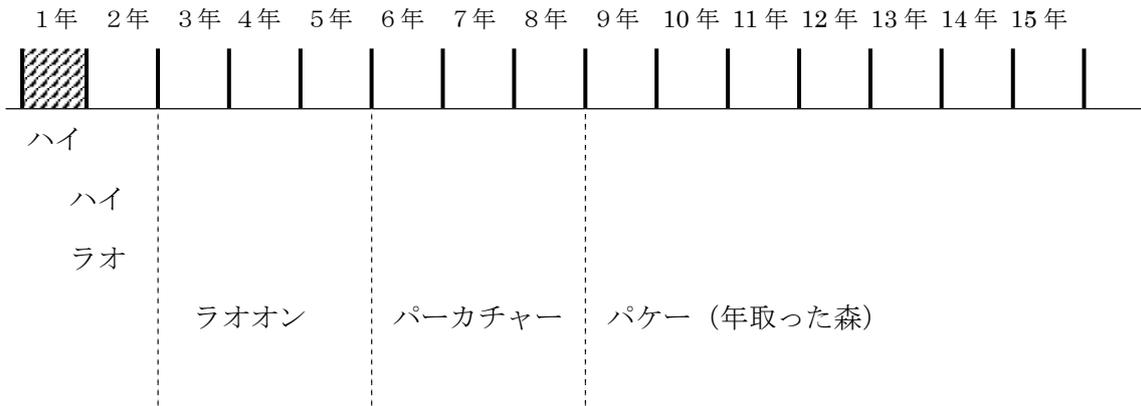
8年目以降の跡地。再びハレツに出来る。

エ クッ

これまで一度も伐ったことのない森。

(ルアンパバーン県コクナン村・タイルー族)

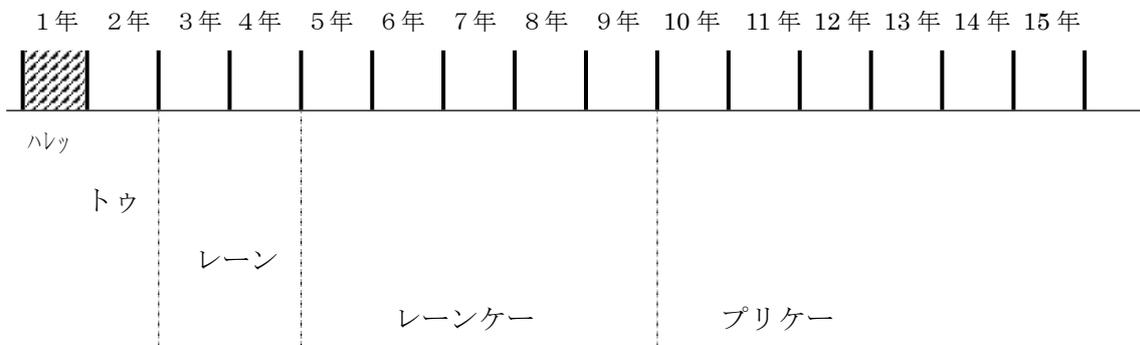
① 休閑地の呼称と利用



- ア ハイラオ
2年目の跡地の呼称。
- イ ハイラオ
3～5年目の跡地。
- ウ パーカチャー
6～8年目の跡地。竹の混じっている場所は再びハイに出来る。
- エ パケー
9年目以降の跡地。それでも木だけの森は10年目以降になる。
- オ パドン
これまで一度も伐ったことのない森。

(ルアンパバーン県ホイジン村・カム族)

① 休閑地の呼称と利用



- ア トゥ
2年目の跡地の呼称。
- イ レーン
3～4年目の跡地。
- ウ レーンケー
5～9年目の跡地。竹の混じっている場所は再びハイに出来る。
- エ プリケー
10年目以降の跡地。それでも木だけの森は20年目以降になる。
- オ クツ
これまで一度も伐ったことのない森。

② 竹の利用に関する諺

ニャンカニョン・ブ ニャンケー・タン・サー・ダンム・シー (若い年の時・食べる 年取った時・編む・マット・)

敷く・寝る：竹の子の時は食糧として食べる。年を取って成長したら寝たり、敷いたりするマットを編む)

4 逃げ隠れる粃と復活の神話

(ウドムサイ県ホイリアン村カム族)

①飛んで畑に逃げ帰る粃

昔、稲が実って収穫の時期になると、村の家々の米倉を掃除しておくど、粃は収穫作業をしなくてもひとりでも畑から飛んできて、米倉に収まるものであった。ところが、ある年に妊娠した女性が怠け者で、粃が飛んでくるといふ日に米倉の準備が間に合わなかった。

飛んできた粃は、高倉に入れずに外に待っていたところ、その女性は粃に向かって悪口を言った。粃は怒って畑に飛んで帰ってしまった。その時から収穫作業をしなければならなくなった。だから、収穫の儀礼の最初の日は、妊娠している女性が畑に入ることは許されない。

②逃げ隠れる粃とその復活

マイソツの竹の節やタライン（箒草）の茎の中から2, 4, 6, 8粒など偶数の粃の種が見つかることがある。これは、誰かの家の米倉で粃に悪いことをしたために、粃が怒って逃げ隠れてしまったものだという。これを見つけたら家に持ち帰り、米倉に宝物として袋に入れて祀るととても運がよく、稲も良く穫れる。種蒔き、収穫の時にこれを畑に持っていく。ある人は、それを翌年のロレッ・チャモン・ゴ（始める・穴を開ける・稲）のプールの鬱金の周りに種粃として播く。収穫したときは、チャオの粃と混ぜたり、種粃として用いる。

③粃を見つけた体験談

ア この村の村長を務めるカンブーンさん（40歳）は、6～7年前にマイソツという竹の節の中から8粒の粃を見つけた。それは、翌年のロレッ・チャモン・ゴの際に、鬱金の周りに儀礼的に播いて、収穫した後はチャオの粃と混ぜた。

イ 同じくこの村に住むシフォンさん（44歳）は、8, 9歳のころ、父親と一緒に森に行ったとき、タライン（箒草）の茎の中に6粒の粃を見つけた。その粃は、翌年翌年のロレッ・チャモン・ゴの際に、鬱金の周りに儀礼的に播いて、収穫した後はチャオの粃と混ぜた。

(ウドムサイ県ホワイレンム村カム族)

①逃げ隠れる粃とその復活

今は粃を穫る前に、稲の穂を穫る時に儀礼があつて、その時には稲の魂を呼ぶ。ところがある時、ある家族があまり儀礼もせず、稲の魂も呼ばずに稲の収穫作業をした。すると、稲の魂が怒って逃げていってしまった。

ところが、ある日マボシという名前で母も父も夫も亡くなった女性が、作小屋を作るために森にマイホックという竹を採りに行った。彼女が、マイホックを伐っていてところ、節の中から7粒の粃が出てきた。彼女は、それを家に持って帰り、翌年の種粃にするため大切に保管した。その7粒の粃は、ゴレーン（陸稲・中間種）、ゴトン（陸稲・晩稲）、ゴドッ（陸稲・晩稲）、ゴトモイウー（陸稲・晩稲）、ゴクロッ（陸稲・晩稲）、ゴチェンワン（陸稲・晩稲）、ゴタンカ（陸稲・晩稲）という7種類の糯種であった。このうち、ゴタンカという稲は、その他の稲が穂には交互に1粒ずつ実るのに対し、穂には3粒ずつ交互に実る稲である。マボシはその7種の種粃で稲作りをし、たくさんの収穫があつた。村人たちは、彼女からその種をもらって稲作りをし、収穫するときはちゃんと稲の魂を呼んで、儀礼をするようになった。

②稲の魂を呼ぶ儀礼の始源

昔、この村にマボシという名前の女性がいた。彼女は、母も父も夫も亡くなり独りぼっちで、不遇なうえに村人にいじめられていた。

ある日、そろそろ村の皆の畑が収穫できそうに実つたが、村からそれぞれの畑まで道がなかった。そこで、収穫するために畑まで道作りをした。皆で歩けるように道を切り開いていった。彼女も伐り払いながら進んでいると、村人が意地悪して彼女の腰のベンホックに伐った木を次々に入れた。

彼女は、自分の畑について、ああよくいじめられたものだと思いますながら、ベンホックの中に入れられた木の名前を呼びながら1本ずつ外に出して地面に置いて、それを1束に集めて「私はよくいじめられました。あなた方(木)の力で稲の魂がたくさん集まるようにしてください」とお願いをしたら、たくさんの収穫が出来た。村人からだ

れくらい収穫があったか聞かれたので、マイヒヤの3節ぐらい穫れたと答えた。村人たちは、竹筒3本と思って馬鹿にして笑ったが、実際に見てみると、一辺がマイヒヤ3節の立方体に入る収穫量であったので驚いてしまった。驚いた村人たちが「どうしてそんなに収穫があったのか」と聞くので、自分が行ったこと（稲の魂を呼んで収穫をしたこと）をそのまま答えると、

村人たちは翌年収穫の時から、それまでの儀礼を止めて、彼女の真似をして儀礼をするようになった。

③稲の魂を呼ぶ唱詞

h a k e e (どうぞ来てください) k o n ・ g o r (子供・稲) k o n ・ m a (子供・稲) k a i ・ k u d (来る・入って) c h o o (畑の小屋) k u t ・ l o w (来る・どっと一緒に) h a ・ t a m (道具の名称だが不詳)
 h a ・ r u (道具の名称だが不詳) h a ・ u n g (ベンホッ) h a ・ o r d (ベンホッ) h a ・ y a (畑の小屋の入り口に準備したものが不詳) h a ・ k r e i (畑の小屋の入り口に準備したものが不詳) h a ・ t a n g a i (竹マット) h a ・ c h o o (畑の小屋) h a ・ l o w (そうした道具を準備しました)
 k o n ・ g o r k o n ・ m a g o r ・ h i e n g (米・黒い) v a n g ・ t e u a n g k o k (長い・稲の穂)
 k o r ・ k a i (も・来てください) y a w ・ o r (に・私たちの方に) g o r ・ k a l o k (米・白い)
 v a n g ・ t c h a l a i (長い・付け根の枝) k o r ・ k a i (も・来てください) y a w ・ o r (に・私たちの方に) k a i ・ t u n g (来る・飛んで) m a ・ b o r d (母・穴のなかに入る蜂) t u n g ・ m a t r a h a i (飛んで・枝に下がっている蜂)
 k o n ・ g o r t a ・ i t ・ i n g (土地の終わり、地の果て) k o r ・ k a i (も・来てください) y a w ・ o r (に・私たちの方に)
 k o n ・ g o r t a ・ k i n e ・ d i n g (頂、一番高い所) l a v a n g (天)
 k o r ・ k a i (も・来てください) y a w ・ o r (に・私たちの方に)

(ウドムサイ県パクメン村カム族)

①鳥が孤児もたらす種籾と妊婦によって逃げる籾

昔、ある村に父も母も亡くなった独りぼっちのコンロックという名前の男の子がいた。コンロックは、ある日モ(弩)を作って、それを持って森に行った。タプンルという鳥を射殺して家に帰ってきた。タプンルを食べようとして腹を割いたところ、胃袋に一握りの籾が溜まっていた。

コンロックは、その籾を種籾にして畑を作ろうと考えたが、森を伐る鉈も籾を植える掘棒も何も道具は持っていなかった。それでもコンロックは畑を作りたくて、村から畑に行く道の途中のモックハルツ(休憩場所)に座って、その辺りを伐り開いて畑にしようと思っていた。そこで彼は、誰かがモックハルツで休憩するたびに、斧とか鉈を借りて竹や木を伐った。道具を貸した人達は、そこを立ち去ろうとする時になると「それを持ってこい」と言うので、コンロックは借りた道具を返した。その時、道具を貸した人達はコンロックの頭を軽く叩いた。燃やす時も火種を借りて、返すときには頭を叩かれた。タプンルの胃から見つけた一握りの籾とを種籾にして畑に播いた。しかし、その種だけでは足りなかったところ、コンロックが眠っているときに霊がかわいそうだと思って種籾をくれた。そのも見も種として播いた。収穫の時にも同じように他の人からベンホッもヤンも借りて収穫をした。それを返すときには頭を叩かれた。畑の米倉を準備するときも同じように頭を叩かれた。

コンロックが収穫の儀礼を行ったら、稲が畑から飛んできて畑の米倉はいっぱいになった。稲がいくら飛んできて畑の稲は減ることがなく、畑の米倉は4つ、5つと増えていった。村人は収穫を済ませて皆家に帰ってしまったが、コンロックは畑の稲が残っているので帰れないでいた。

村では、畑の米倉から村の米倉に籾を運び終わったら、祭りを行うことになっていたが、コンロックが村に帰ってこないで、妊娠した女性2人が呼びに出掛けていった。妊娠した女性たちは彼に向かって「お前はなぜ村に帰ってこないのか。他の人達は皆作業を終わって村に帰ってきて、儀礼が出来ないのでお前の帰りを待っているぞ」と怒った。コンロックが「まだ収穫が終わらないので帰れない」と答えたところ、妊婦たちが「この葉っぱ(ラカチャンという葉)で稲を叩くよ。そうすれば早く収穫が終わる」と言って叩いた。そうしたところ稲は怒って飛んでこなくなった。畑にはまだたくさん稲が残っていたので、コンロックは穂を抜いて収穫を終えた。その後、コンロックはだんだん裕福になっていった。だから、収穫儀礼の日には妊娠した女性は畑にはいることは許されない。

タンプルの胃から出てきた粃はゴレンという晩稲の糯種で、霊がくれた粃はゴロイという晩稲の糯種である。
②鳥（の巣）から寡婦にもたらされる種粃

昔、この村にマボイスという名の主人も死んでしまった独りぼっちな女性が住んでいた。彼女は、独りで焼畑を行ってきた。マボイスは貧乏ではあったが真面目に働き、母から教えてもらった儀礼もそのとおりに行ってきた。ある日、畑の作業を行っていると、タンプルという野鳥が、畑の脇にあるマイホックという竹の枝に巣を作って住んでいた。

いよいよ収穫の日になった。彼女は、鳥の巣が気になって見に行ったところ、タンプルは飛び去って行ってしまった。鳥の巣を見てみると、巣の中には30粒の粃が残されていた。彼女は、卵があるはずなのにおかしいなと思いつつも、その30粒の粃をもらってきて、大事に保管しておいて翌年の種粃にした。それを畑に植えたところ、収穫の時にベンホッ一つの量に増えた。

その翌年、ベンホッ1つの粃を種粃にして畑に播いたら、ヤンで40個分の収穫があった。

ある日、彼女は夢を見た。見た夢は、タンプルが飛んできて「あなたは、毎年同じように儀礼をしてくださいね。わたしは、あなたに種粃を持ってきてあげたのですから」と言った。彼女は、その後タンプルに言われたとおりに儀礼をしてきて、毎年毎年稲粃がよく穫れた。

タンプルの巣から見つかった粃は、今もある粃殻が赤っぽいゴインムという晩稲の糯の種子である。

③稲の魂を呼ぶ唱詞

E ~ Kon Man Gor (子供の稲) Kon Man Ma (子供の稲)
Vet Cha Kang (家に帰ってこい) Vet Cha Choo (畑の米倉に帰ってこい) Dang Kei (ここの米倉に) Da Gor (恐くなくように) Dang Kuan (びっくりしないように)
Vei Yo Yong (父さんと帰ってこい) Vei Yo Ma (母さんと帰ってこい) Da Choo (この畑の米倉に) Da Kei (ここの米倉に)
(ルアンパバン県ハッサプーイ村カム族)

①逃げ隠れる粃と寡婦と収穫作業の始源

昔、主人を亡くしたマボイという名前の女性がいた。昔は、畑の稲が実るところになると、チョオ（畑の作小屋）をきれいにしておくと、穂から粃が飛んできてくれた。

ある年、マボイ以外の人は主人もいたので米倉の準備も終わっていたが、彼女だけは準備が間に合わないでいた。準備が終わらないうちに粃が飛んできたので、彼女は怒ってチャッチャムという葉っぱで粃を叩いた。粃は怒って畑の穂に飛んで帰った。その時から手で扱って収穫しなければならなかった。だから、収穫の時にチャッチャムという葉っぱを食べてはならない。

②粃を見つけた体験談

昔、マイヒヤという竹の節の中に、ゴッランダムという中間種の糯種の粃を見つけた。それを種粃に混ぜることはなかった。このゴッランダムは、この村に昔からずっとある品種である。

5 若干の考察

(1) 焼畑における竹の重要性

これまでの事例をとおして、この地域のさまざまな民族が、焼畑の適地として竹と木との混交した森を対象にしていることが明確になった。例えば、ポンサリー県パクバーン村（ラオ族）の「この辺りでは、森の竹と木との混ざり具合の比率は、マイヒヤが1/3、木とその他の竹が2/3程度が好まれる。竹だけの森では、鼠が多くて稲に良くない」と言う事例などは、その典型的な例として挙げることが出来る。そして、その大きな理由として水分の存在を挙げている。その基準によって、焼畑に適する竹の順番が決められていると良い。焼畑による陸稲栽培にとっては、その成長と収穫にとって竹をとおしてもたらされる土に含まれる水（雨も含めて）が極めて重要視されていることが分かる。これまで水の問題は、水田稲作との関連でしか議論されず、焼畑と水の関係はそれほど議論されてこなかった。しかし、ウドムサイ県ケオ村（カム族）の「濁った水、洪水の夢を見たら、それは稲がきれい（黄金色）に実ると言う標であるので、焼畑に伐ってよい」や、「小さな川の夢は、畑

が木株だけになるという微なので、焼畑に伐ってはならない。また、透明な水や川に倒木がある夢も焼畑に伐ってはならない」という伝承は、明らかに大水、大雨の予兆を語るものであり、焼畑地の選定に際して霊が許可を与えるこうした夢の内容をみても、畑地選定の基準が水（雨）にあることが明らかである。人々はその基準によって竹の種類を選び、焼畑地を選定していると言って良い。さらに、その水分が森の再生を促進させることに繋がっていることも分かる。例えば、ウドムサイ県ホイリアン村（カム族）やパクメン村（カム族）では、竹混じりの森と木だけの森とでは、レンカニョーン（若い森）からプリケー（年取った森）へ再生する年数に、明確な差を認識していることが分かる。特に、ホイリアン村では5～6年の違いがあると認識をしている。これは、その他の民族においても若干の差がありながらも、竹混じりの森の優越を認識していることを示している。つまり、竹の再生そのものが木の再生をも助けることにつながっていることも、重要なこととして指摘できるということである。決して、焼畑跡地に竹が優先することが負の生態ではないということ、この地域の焼畑民の認識として確認しておきたい。

（2）焼畑その後—再生過程の森への眼差し

これまで、焼畑の研究は作物栽培が終了するまでを研究の対象としてきた。しかし、焼畑民にとっては、栽培が終了した後もその跡地は重要な食糧の採集地であり、竹細工はおろか建材の採集地であることが明らかになってきた。例えば、ルアンナムター県チャルンスツ村（カムクエン族）は、レンカニョーン（若い森）から「竹の子をはじめとして、5～7月の時期には、ティーモイ（5～7月）、ティータワン（5～7月）、ティートルーン（5～7月）、ティートック（5～7月）、ティーカ（5～7月）などのティー（茸）類が、5～7月の時期には、ラックンパーイ、クンパーン、ラックリン、ラニョネー、ラカンタトーなどの茸類も採れる。その他には、ラ（野性の野菜）としてラタウエイ、ラプンベツ、ラワンなどが採れる」と言い、栽培停止後3年目から9年目の森からさまざまな食糧を採集していることが分かる。これはまさに焼畑跡地を野菜の畑として半自然、半栽培の状態で管理し、そうした眼差しで視野に入れていているということを照明している。さらに、「ニャンヌン・プッ・ポー・マー（若いとき・食べる・と共に・御飯）、ニャンタオ・シッ・ポー・ヨー（年取ったとき・寝る・と共に・人）」という諺は、そのことを象徴的に表しており、若い森のみならずレン・ケー（年取った森）からは、家の建材となる竹を採取していることをも示している。こうした諺は、チャルンスツ村のみに限らない。ウドムサイ県ナムコム村（カム族）の「ニャンムカニョム・プ・セ・マ（若い年の時・食べる・と・御飯）、ニャンムケー・プ・セ・シー（年取ったとき・食べる・と・煙：草年取った竹は、竹の歯ブラシにして歯を磨く）、ウドムサイ県パクメン村（カム族）の「ニャンカニョーン・イ・プ（若い年の時・我々・食べる）、ニャンムケー・テン・サオンカン（年取った時・作る・家の建材）、ルアンパバーン県ホイジン村（カム族）の「ニャンカニョーン・ブ（若い年の時・食べる）、ニャンケー・タン・サー・ダンム・シー（年取った時・編む・マット・敷く・寝る）」と共通する認識である。ウドムサイ県ホワイレンム村（カム族）の「若いやわらかい森は食べる、年を取った森は寝る」という諺は、竹の利用の方法を説明すると同時に、再生過程の森に対する眼差しを示している。さらに、ポンサーン県マイソンファン村（ラオケー族）の「ヒヤポー・シア（蜂の巣は7日）、ヤポー・シヌ（畑の巣は7年）」という諺は、蜂の巣は7日経つと蜂蜜が採れ、ヤポー（3年目の跡地）は、7年経過すると、つまり10年経ったら再び畑に出来るということを語っており、焼畑のために必要な休閑期間を象徴的に示している。この森も竹混じりの森であることはいうまでもない。

こうした竹に対する認識は、1年目はアワヤマ（粟の焼畑）、1年すれば竹の子畑、3年すればもとの竹の森、10年すればまたアワヤマという、鹿児島郡十島村悪石島の竹の焼畑の伝承や、大隅東海岸や九州山地の竹の焼畑の伝承と深くつながる。こうしてみると、ラオスの焼畑民にとって、「原始林」「原生林」が「森」であるのではなく、竹と木の混じった再生の森こそ森であり、人間にとっての環境であると言えるのではないかと思われる。そして、このことが、中国の雲南やタイ北部、ミャンマー北部など周辺の回復不可能な赤肌の露出した森を生み出してきたことへの反省につながり、ラオスの森をそうしたことから回避する道筋を示しているように思える。

（3）稲作儀礼と神話

今回の調査で稲作儀礼とその由来を説く神話が確認されたのは大きな成果であった。昨年度のルアンパバン県コクナン村（タイルー族）における聞き書きと併せてみてみたい。

① コクナン村では、種を播いて2ヶ月経ち、稲の丈が膝の高さぐらいになったころ、聖なる種時きをした聖なる畑の閉めてある竹の一方を開いて、家から持ってきたパーシュウ、パークンという魚2匹をホンの中に生きたまま供える。この魚を供えるのことの由来を語る次のような伝承がある。

昔、タイルーは米作りはしていなかった。山の中に7握りの大きな稲の穂があって、収穫の時期になると、ラオカオ（米倉）をきれいに掃除して鐘をポーンと叩くと、粃が飛んできて独りでにいっぱいになるものであった。ところが、あるとき、主人を亡くしたお婆さんが、ラオカオを作り直していた。しかし、1人での作業であるため手間取り、完成しないうちに手に持っていた棒が鐘に触れてしまった。他の家のラオカオは粃を迎える準備が終わっていたのでいっぱいになった。しかし、お婆さんのラオカオは準備が終わっていなかったため、飛んできた粃は外に溜まっていた。お婆さんは、悔しさの余り怒って棒でその粃を叩いたところ、村の全部の粃が川や山に飛んでいってしまった。それ以後、タイルーは粃がなくなってしまった。ところが、ある時、村人が三角網を持って川に魚取りに行ったところ、パーシュウとパークンの2匹を掬った。その2匹の魚は「私たちは恋人同士だから殺さないでください、その代わり米を差し上げます」と命乞いをした。村人が命を助けると米をくれたので、タイルーは再び米を手に入れることができた。だから、ホンカオヘツの儀式にこの2匹の魚を供え、儀式が終わると生きたまま川に返すというのである。

この伝承は、タイルー族がかつて稲作をしていなかったこと、山中に7束（7品種を意味するかも知れない）の穂があり、時期になると迎えの準備を終えた米倉に飛んできていたこと、寡婦が自分の手落ちにもかかわらず、飛んできた粃に危害を加えたため、飛んで逃げて姿を消したこと、そのためタイルー族は以後米を手にすることが出来なくなったこと、しかし、掬えた魚を助けることで米が復活したことが語られている。そしてそのことが稲の生育促進の儀礼を支えているとその由来を語っているのである。

これに対して、ウドムサイ県ホイリアン村（カム族）では、収穫の時期になると畑の実った粃が迎えの準備を終えた米倉に飛んできていたこと、怠け者の妊婦が自分の手落ちにもかかわらず、飛んできた粃に悪口を言ったため、飛んで畑に逃げ帰ったこと、そのため収穫作業をしなければならなくなったこと、だから、妊婦は収穫初めの儀礼の日に畑に入ることが許されないということが語られる。さらに、同村ではマイソツという竹の節や、タライン（箒草）の茎から偶数の粃が見つかることがある。これは、誰かの家の米倉で粃に悪いことをしたために、粃が怒って逃げ隠れてしまったもので、それが復活したものだと言語。この粃は、米倉に宝物として祀り、種時き、収穫の時にこれを畑に持っていくとたくさん収穫がある。さらに、翌年の収穫初めの儀式に種粃として播き、その粃が翌年からの棚もみに混ぜられて引き継がれると語る。

このコクナン（タイルー族）とホイリアン（カム族）の二つの村は、ガ川という川の下流と上流に位置する村であるが、その神話の内容には明らかな相違がある。それを比較してみると、前者が稲作をしていなかったことに対して後者は収穫作業をしていなかったこと、粃に危害を加えたのが、寡婦であるのに対して妊婦であること、粃の復活の場と関わる生き物とが、川と魚であるのに対して焼畑の森と竹や箒草であること、関わる稲作儀礼が、成長促進儀礼であるのに対して収穫儀礼であるという違いが指摘できる。

まず、稲作をしていなかったと語るコクナン村のタイルー族の伝承は、他に比較すべき材料を持っていないが、僅かにコクナン村の下流ナムガ村のタイルー族は、稲作をしていて粃を盗まれた後に粃が復活するという伝承を持っていることを確認している。

これに対し、カム族の場合は、収穫作業の開始の由来を語っているが、これと同じ内容は、ウドムサイ県ホワイレンム村（カム族）、ウドムサイ県パクメン村（カム族）、ルアンパバン県ハッサプーイ村（カム族）でも語られている。これが、他の村の事例を増やさないと何とも言えないが、今のところ両民族の差異として確認しておくに留めておきたい。

次に、稲の魂が飛んで来たり、飛んで逃げ隠れてしまうという伝承は、両民族に共通するものである。特に、ウドムサイ県ホワイレンム村（カム族）の稲の魂を呼ぶ唱詞は、呼び集められる稲の魂が稲の子供として認識され、呼ぶ主体が稲の母であることを物語っている。このことは、粃が逃げ隠れる原因を作る主体が寡婦と妊婦であることと関わりがある可能性がある。カム族の場合、妊婦は粃が逃げる原因となるのに対し、逆に寡婦のもと

には豊作となる種粃がもたらされるのである。妊婦はお腹に子供を宿しており、稲の子供の母とは成り得ないということ象徴しているのであろうか。また、この寡婦が収穫儀礼の在り方を教え伝える存在として語られていることは、母の象徴を表して要るとも言える。

ところが、同じカム族でもウドムサイ県パクメン村（カム族）では、粃が逃げる原因となるのは妊婦ではあるが、豊作となる種粃がもたらされるのは寡婦だけでなく、孤児の男児も登場する。稲の子供と孤児の男児は、母を求めるといふことと繋がるからなのか、これもさらなる事例の積み重ねと比較の作業が必要となる。ルアンパバーン県ハッサプーイ村（カム族）で語られる内容が、ルアンパバン県コクナン村（タイルー族）のものと同様のもも含めて問題を提示するのに留めおかざるを得ない。

次に、稲の復活の場とそれに関わる生き物についてみてみたい。コクナン村のタイルー族は、それが川であり魚である。これはいずれも水に関わるものである。これに対して、カム族の場合は、森ないしは畑がその場となり、復活に関わる生き物は、竹の節ないしは箒草である。これはいずれも焼畑跡地の再生の森の代表的な植物であり、その象徴として粃の復活と関わって語られるのであろうことが推測できる。

さらに興味深いのは、ウドムサイ県パクメン村（カム族）の場合、タプルという鳥の死体（胃袋）から粃の種が復活すると語られていることである。これは、穀物の死体化成の神話と考えてもおかしくない。また、飛び去った巣（居なくなった鳥）から粃の種が復活すると語られているのも、同様の範疇で理解して良いと考えられる。今後の課題としておきたい。

（４）復活した粃の価値

コクナン村のタイルー族にしても、カムにしても復活した粃を種粃として継承していくことは共通して語られることである。コクナン村で語られる森の7束が7品種を示しているのか、そうだとしたらその品種がどういふもので、現在の品種とどういふ関連があるのか、さらに確認の必要があるが、復活した粃が種粃となり稲作が復活されたと言っているのであり、少なくとも現在まで引き継がれていると考えてよさそうである。

これに対して、ウドムサイ県ホワイレンム村（カム族）の場合は、復活した7粒の粃が、7品種の種粃であり、いずれも早稲種を含まない中間及び晩稲の種粃種であることが明瞭に語られ、現在でも引き続いて栽培されていることが分かる。逆の言い方をすれば、こうした神話を背景としてこれらの品種が継続して栽培され、保存されていると言ってよいであろう。このことは、ウドムサイ県パクメン村（カム族）の場合も、ルアンパバン県ハッサプーイ村（カム族）の場合も同様であると理解して良い。つまり、彼らにとって稲（種粃）は、神話というレベルで規定されているのであって、収穫が上がる品種であればよれで良いというものではないということである。まさに、多様な品種を保持できた根元を示しており、これによって「緑の革命」とは無縁であったのである。今日、品種の単一化への一途をたどる稲作に対して、こうした稲作神話の持つ意味に注目して、今後の調査を進めてみたい。

今回の調査結果からはこれらの他にも興味深い問題が出てきている。今回の方向では扱えなかった問題に「飛ぶ稲魂」がある。日本列島では民俗事例として唯一知られているのが奄美大島の龍郷町秋名の「ショチョガマ」における、ニャーダマ（稲魂）招きの唱詞もホワイレンム村（カム族）のそれとの比較を試みることで、新たな理解が可能になってくることが期待できる。今後の調査においては、さらに事例の積み重ねを行い、南九州及び南西諸島との比較検討を加えていきたい。また、今回の報告からは省いたが、竹の生活道具の製作技術を具体的に記述し、併せて実物資料の収集を進め、その機能と変遷とを明らかにしていきたい。